

明治四十五（大正元）年度

現時代の要求する婦人

治國齊家修身、即ち平たくいへば國を治め家を齊とへ、身を修めるといふことは、昔から何れの國でも言ひ、又其間に離るべからざる關係のあることも言ひますが、併し家族制度といふことは、國家の制度、教育制度とは別であり、其趣きを異にする様であります。けれども、之は皮相の見解であつて、深く研究すれば、この三者は、昔も今も、亦將來も其軌を一にすべきものであり、其理想、其教育法も一致しなければ、到底何れの方面も眞に効果を擧ぐることは出来ません。

然るに國を治むるの道即ち治國の制度は、是迄東西共に君主專制であつて、其家制も家長制度を執つて居つたのであるが、今日に至つては、所謂文明國といふ可きものは、皆立憲政體若しくは共和政治に變りましたから、其國を形成すべき家族制度も、矢張り羅馬から起つた所の家長制度、即ち父が妻や子やの家族のものを自分の持ち物の如く扱ひ得る殆んど無限の權利を有せる制度を執つて居るものは殆んどなくなつたのであります。政體が變つて來て、國の制度が變つて來たので、家族制度も矢張り之と一致する様に變つて來たのである、即ち男女の兩

本位となり、夫婦間の關係も、非常に平等的になつて來たのである。唯斯かる制度は、元來保守的のものでありますから、政體の進化よりは、勿論幾分か遅れて居ることは免れないのであります。我國の家族制度も、憲法上、又は風俗習慣、或は男女間の理想から考へても、矢張りこの影響を受けて居るのである、一家の父なるものが無限の權力を持ち、妻や子に對し殆んど生殺與奪の權を握つて居るといふやうな制度も、法律も、今は破れて、各人の考へも大いに異なつて來ましたから、昔の家と今日の家とは、非常なる相違があると云はねばなりません。且つ世界の大勢より見て、今後益々改善を加ふるの必要があり、而して其改善の原動ともいふべきは、一家の二柱である所の父母、即ち男女兩本位から起らねばならないのであります。故に今後の女子教育も、この目的に適ふやうな方法を執らねばなりません。動もすれば近來保守的の傾向を帶び、家長制度復活の傾きのあるのは、根本を考へざる皮相の觀察、傳説に因はれたる固陋の見解から來たものと言はねばなりません。

今後の理想の婦人なるものは、勿論封建時代とは異ならなければならぬので、之を婦人の側よりいへば、今後の理想の夫は、等しく昔と異ならなければならぬのであります。即ち理想としては、丁度其時の要求に應ずる所の素質及び人格を有せな

ければならぬ故に、男の方でも女の方にしても、この素質、人格に重きを置くやうになり、亦ならねばならぬのであります。

第一に最も問題となるは、男女兩性の相違であつて、即ち男は男らしく、女は女らしく兩性の特色が整然と立つて居らなければなりません、此區別なるものは、古今東西を通じて動かす可らざることであつて、永久の眞理であります。而し唯變つて行く、進んで行くといふことは男は男らしく、女は女らしき理想が、何んななるかにあるので、決して其各々の特色を失ふといふのではない。男女兩性あつて始めて家も出來、國も出來、人も出來る、男女兩性に特色があるが爲に、愛もあり、美もあり、趣味もあるのであるから、何うしても此特性は失つてはならぬが、唯それを最も善く變へて發達させることが必要なのであります。然るに女子に高等の教育を授けると、婦人の位置を高め、男女の價値を同等に進めるから、男が女らしく、女が男らしくなるといふ結果になり、即ち男女兩性の特色を失ふやうになると思考するものがありますが、之れは大なる誤謬であるといはなければなりません。彼の女子の地位が高まつた、アングロサクソン人即ち英米の實例を見ましても、教育が高まるにつれ女子の地位、品位が高まり、女の力が男に劣らざるやう進みしことが、男女の區別を失なつたかといふに、決し

てそんな傾向はなきのみならず、却つて兩性が進むに従つて特色も益す發揮するの結果を得て居るのであります。それで、この英米の女子教育も近來の制度に合ふ様に教育したのは、勿論半世紀ばかりで、其以前は、家長制度の理想を以て女子を支配し、教育したわけ故、僅かなる期間に於ける經驗に見て、直ちに斯うである、永久誤らぬといふことは出來ないけれども、是迄の方針をます／＼改善し、今日の時勢に適應する様にし、以て將來の教育方針を立て、行く様にしたならば、愈よ完全なる發達を遂ぐる事が出來ると思はれるのであります。

では等の教育の結果が何ういふ風であり、又男女間の特色が何んなに著るしく發揮されたかといふに、第一男女の身體が變つて居る、即ち女子の美といふ方面から見れば、體格は勿論、容貌、皮膚若しくは毛髮の如き特色が、總ての點に於て著るしく變化し發達して、益々明かに女子らしくなつたのである。又其趣味に於ても、非常に向上し、一段の進歩を早したのである、文明國程趣味の進んで居るといふことは、茲に言ふ迄も御座いませぬ。夫れ斯の如く、風俗、體質等、總ての點が教育の結果、益々男女兩性の特質を發揮させつゝあることは、争ふ可らざる事實であると同時に、人は野蠻程男女の區別が明かならず、文明に進むに隨つて、益々兩性の區別が判然して來るもの

であるといふ事實を見たならば、進みたる教育、即ち高等教育を施すといふことが、男女兩性の區別を没却し去るとの理由は決してある筈はなく、亦實際ないので事實が慥かに之を證明し居るのであります。

次には心理状態であります。男は勇氣とか冒險とか、活動を理想とし、女は犠牲とか、謙遜とか、柔和とか、極めて精神的の所が特色である、男は抽象的、哲學的思想に長じ、女は宗教的、直觀的、感覺的、知覺的若しくは文學的の方面に長じて居るのである。で此の各々の特色も、教育が進むに従つて、益々發揮しつゝあるのであります。併し是迄のカルチュアは男の方に重きを置きたる爲め、女子は後れて居たが、即ち心の能力は男より後れて居たが、近來教育の進んだ結果、女子も劣らないことになつて來ました。昔は兎に角、今日は直觀的、經驗的の知識が重んぜらるる様になりましたから、決して女子の價値が少ないとは申されません。元來遺傳性なるものは、男子よりも女子の方に多くあるとも、決して劣ることはないから、所謂第二の國民を造るといふ上からいつても、其根本が育つて行きつつある間には、必らず全體が育つ故に、即ち男女全體の知識が進むといふことになるのであります。近來の女子教育を高めることが、智力を進めるとはいへるけれど、男女互の特色を

滅却するといふことは、普通今日の言葉ではいへないのであります。要するに、今後男女兩本位にするといふことは言ふけれども、男女の區別が無くなるといふことではないので御座います。

然らば男女の兩本位とは何ういふことかといへば、即ち男女の人格に重きを置くといふことであります。男子が女子に望む所も又女子が男子に望む所も、皆人格の點であります。今迄の如く、女子を自分の道具の様に思ひ、遊ぶ器械の様に思ふ考へはなくなり、女子も立派な品性を備へたる人格あるものにて、之を自分の妻として、二が一となり、兩方が相助けて、共同し、好伴侶となつて、昔の如く壓制的、奴隸的にするに非ずして、眞に尊むべく、愛すべく、價値あるものとして待遇するやうになるのであります。家柄や財産や地位に嫁せんとする婦人を理想とせず、眞に自分を知り、又意思も鞏固であり、家政、育児等、安んじて家庭を任せ得べき確乎たる人格のある婦人にして、始めて趣味も、程度も、相一致し、自分の好伴侶となるといふことを望むことが出来るのであります。女子も亦然りで、家柄や財産や其地位を見て結婚せず、自分の夫たる人の人格を見て結婚すること、即ち其人に嫁よめくのであつて、昔の様に格式や經濟の都合上でなく人と人との結婚となることゝなるの

であります。されば結婚といふものは今迄の如く婦人の人格を埋没するに非ずして、男女両性一致結合し、一層進んだる人格、家風が出来る様なことゝなるであります。併し乍ら、斯くいへば女子の従順の徳を缺きはしないかとの非難が起るかも知れませんが、眞の従順は自分の力、意思があつて始めて出来るもので、夫たる人の要求を充すには、何うしても妻にそれだけの力がなければ出来ませぬ。

夫が妻に望み又社會が立派な婦人として認むる所のものは、貞節であります。この貞節は、纖弱き婦人に要求するは困難であつて、昔から支那にては男女席を同じうせずとか、手から手に渡さぬとかの種々の規則を設け、又夫たる人、父たる人も、婦人を保護するを缺く可らざること、思ひ、保護者監督者を離さぬといふことにして居つたのであります。而して亦、社會的制裁も極めて嚴重で、聊かにも其貞操を傷くるが如きことがあつたならば、社會は擧つて之を放逐し、峻嚴なる制裁を加へる様にしましたから、女子自からも慎み、又他動的にも誘惑に陥る様な場合は、殆んど無かつたといつてもよいのである、女子が他に嫁ぐ場合にも、先方の身分や地位或は職業等を考へ、其釣合を取るといふ制度を超えませんでした、斯様に總てが所謂規矩準繩に當て嵌めてありました故に、昔の婦人には殆

んど貞操を傷る機會がありませんでした。然るに、時勢の變遷と共に、斯様な窮屈な制度も漸次取り除けられ、女子も男子と同じく人格を備へたものであるから、種々の蠻的制裁を撤して成る可く之を開放し、社會に立たしむる様に致しました結果、男女間の隔ての垣も餘程薄くなり、随つて周圍の誘惑も繁く、貞操を壞らんとする鋭利なる斧も身邊を取り捲くといふ有様であります、此の渦中に立つて、纖弱き女子が毅然として其貞節を完うするには、餘程確乎たる精神を持ち、自から堅く守る所がなければ到底其徳を全うすることは出来ません、されば今後の女子は、一方に學藝を磨くと同時に、他方には精神の修養を怠らずして、鞏固なる意思を有し、心の中に動かす可らざる信念を蓄へ、堅く守る所があるものとならねばなりません。而して其精神修養の方法に至つては、決して一二にして足らずであります、先づ古今東西の貞操烈婦の言行を讀むとか、經典や漢籍を調べるとかいふことも、非常に効果があると思ひます、尤も肝要なのは今日に最も適切なる修養法を探ることが大事であります。

次には進歩の徳であります。此事は範圍が廣う御座いますが、先づ身體の健康、精神の修養、其他智力の方面もありませう、併しこはつまり遺傳的に受けた性質と、教育の結果で得た

所の新らしき習慣にて出来たる品性の進歩、習慣の進歩にあるのであります。而して其遺傳及教育から来たものには、善惡もあり、長所缺點もありますから、其處でその缺點を補ひ、惡癖を矯めるには、新らしき習慣を作らなければなりません。畢竟新らしき行爲、新らしき活動が出来るとならねばなりません。若し古きをのみ繰り返へして居つたならば、所謂千遍一律、少しも進歩せざるのみならず、身體も新らしき習慣活動を加へなければ、早く老ふるに至るのであります。彼の健康を害なひ、婦人の美を損し、夫婦の關係、家庭の幸福をも破壊し、甚だしきは一家の紊亂、若しくは夭死の基となるものゝ如き、多くはこの新らしき行爲、新らしき活動、一言以て之を掩へば即ち進歩の徳を缺いた結果に胚胎することを知つたならば、實に一層の注意を拂はなければならぬことであります。で、進歩の徳を養ふには、進歩の力がなければならぬ、進歩の力を得るには、即ち教育を受けなければならぬ、高等の教育を受けなければ到底新らしき行爲と新らしき活動とをする原動力は得られぬのであります。

女子は、其天職を完うするが爲にも、絶えず學びて進歩したる知識を得、時運に後れぬ様にしなければなりません。普通一般女子の職務は、主に家政の整理、子女の教育でありますが、

昔は女子は唯、裁縫、炊事の様なことにて済みましたけれども、今日は科學の應用となり、種々の製造業も一層盛大を來し、面目を一新しましたから、尙此上に新らしき女子の職分が出来たのであります。この新らしき職分を完うするには、日進の知識、腦力が必要になり大切になつて來たのであります。而して女子の職分として最も大切な子女の教育、即ち國民を造るといふことも今日は單に生れた子を育成するといふことに止まらないで、生れる迄の遺傳を教育するのである、ユージニック（即ち生物學と社會學の原理を人種改良に應用したもの）の理を國民教育に及ぼし、其源を涵養し其根本を改善することを努めなければなりません。此遺傳の力が見出されてから、女子の責任は一層重きを加へて來たのであります。これには今迄ない所の學問、人格の修養、家庭の關係等を益々改善しなければならぬ故、何うしても學ばなければ、其職分を完うすることが出来ない様になつたのであります。

女子にして進歩の力を缺き、新らしき行爲、活動をすることが出来なかつたならば、家庭は實に單調となり、無味乾燥、恰かも沙漠の如き有様となるであります。其結果、夫婦間の愛情も薄らぐといふことになり、到底家庭の圓滿を期することは出来ませぬ。此の點より見るも、今後の婦人は、益々進歩すべ

く修養の出来る人とならねばなりません。

右の外、理想の婦人としての要件は、從來の美質の保存、男女共に必要なる人格の要素を養ふこと等、多々ありませうが、先づ以上にて重要な事項を擧げ得たと信じます。

「名流大家の觀たる理想の婦人及家庭」明治四十五年二月

信仰の建設

宗教の利弊

聖オーガスチンは「人は心の中に常に不安を懷いて居る、それは神を見出さんとして居る心の不安である」と云つて居る。誠に人間は如何なる野蠻時代にあらうとも又何處迄進んだ文明人でも其の心の奥底にこの不安を懷かないものはない。今日吾々日常の心の不安は即ちそれである。これは久しい間の大問題で、諸子が毎週修養會を開いて宗教の比較研究を試みられたのも即ち目的はこの不安の心を辿つて其の求むる所の眞の宗教的生命を獲得せんとするのである。がこの心の要求は理論や組織のみで満足出来るものではない。即ち智的要求ばかりではなく、眞に要求して居る所のものとは根本性格の要求の満足、即ち

信仰である。それ故今日誰もが切望して居る所のものは最早宗教の比較研究ではなく、各自が其の程度に於て信仰の境界に進まんとして急いで居るのである。併しこの信仰といふ事は、外よりするものではなく、内より起る各自の経験と、求むる所の神と相一致し、直感し相觸れ得る事が根本となるものであるから、他人が言葉を以て分解し説明する事は出来ぬ。今日私がお話しようと思つて居る事も唯私自身の信仰上の経験を語るに過ぎぬ。この中から或生命を見出し、或光を感ずるといふ事は、相互に等しき経験をもち得た時の無聲の聲の傳播であらう。要は各自に自分の心のありのまゝを省みて、今日迄持つた信仰と多くの假説とを統一融合して新たに自分のもの即ち自分の確信をつくらねばならぬ。停滞し易く迷信に陥り易い宗教の利弊は茲に起るので、生命のない宗教の形式を固守する事は勿論諸子に満足出来得るものでなく、さらばと云つてこの舊弊を逃れ出でたるものも、常に移り變る假説に依つて、其の度毎に自分の信仰に動搖を來して其の人格、主義、考も動いて終始一貫する事が出来ない爲、人格の根柢に矛盾衝突を來し、混沌たる思想に忙殺せられて、一つの確信なく、信仰なく、實に危険なる状態になるのである。今日の弊害は寧ろこの、あまりに多くの宗教を知つて一つの信仰もないといふ所にあるのである。

宗教の變動と信仰の不動

自身自身の経験を考へても、始めは確に佛教を信じて居つた。又神道も、儒教も、基督教も信じた。其の頃から後十數年、今日に至る迄の私の信仰はどう變つたかと云ふと、或人は私の主義を行ふこの女子大學の主義を評して基督教であるといひ、又或人は排基督教であつて、寧ろ佛教に力を入れて居ると考へた事もあるといふ。或は倫理學或は哲學或は社會學の人道宗教、又はプラグマチズム又は進化論を信仰として居るとも評した人もある。成程此等は一々異なつたものであるが、吾々は是等の凡てを説き又信するのであると云ひ得るのである。なぜならば吾々は一度信じた事、一度行つた事、経験した事は決して消滅するものではない、人爲的に破る事は出来ぬといふ事を信ずるからである。私が子供の時佛教の信仰を味ひ神道を味うた其の信仰が、今日も尙私の信仰の土臺となつて居るのである。この土臺の上に種々なる新しい経験を更に加へて生れかはるのである。人間の精神的生命が生れ更るといふ事は従前の信仰が消えるのではなくして之に新しい要素が加はるのである。即ち思想の停滞を防ぎ腐敗を消して眞に活きたる信仰を得るのである。これは十年間同じ生活をして來た會員諸子は同様の経験を感し

得らるゝであらうと思ふ。吾々は時に佛教であり、神道であり、基督教であつた。而も常に眞實に確い信者であつた、信仰の表れは斯く様々であつたが、併し其の歸着する所は一でなければ斯かる経験は得られぬと思ふ、即ち one and many で、佛の所謂平等無差別である。我々は皆離すべからざる一つのものゝ中に支配されて、而も銘々に特色を備へられてある、と同じやうに、宗教の表れでも種々なる形式になつて居るが、私は各宗の眞髓は唯一であるといふ事を信するので、この點から云つて各宗の眞髓を通じて吾々の信仰は終始一貫して動かぬものであると云ひ得るのである。そこで吾々の今日の要求はこの宗教上の経験を整理して茲に、最も新たに確實なる信仰を建設しようと云ふのである。即ち宗教の起原を追求し、宗教の實在を求めるのである。茲に一言して置くことは、吾々が凡ての宗教、社會學、心理學、哲學等を此の信仰建設の材料とするといふ事は、是等のものを吾々の頭に於て考へたのではなく、銘々の生活に實現して何かの経験になつて居なければならぬ。然し信仰生命の建築は機械的に出来るものではない。時間と空間に依る精神的實在の用材でなければならぬ。この用材を以て如何に建つるか、如何なる働きをとるかを知る爲に茲に紹介すべき事がある。

フリー・メイソン

フリー・メイソンといふ或團體がある。米國あたりでは祕密結社と名づけて居る。所謂俗人には見えぬといふ意味であらう。文字の意義を尋ねると Free mason とは「自由石工」即ち「自由建築師」といふ事である。即ち、Solomon の Temple を作るといふのである。ソロモンはヘブライの國王であつたが、その意味ではない。この Sol とはエジプトにて太陽といふこと、又 Temple は宇宙の意味で、即ち天國を作り完全なる社會を建設すると云ふ意味で、ソロモン王の宮の事ではないと思ふ。即ち The architect of Universal 宇宙の建設者の意である。この團體には英帝、獨帝にも入られたる方がある。米國だけでもこのメイソンの人が百萬人もあつて、皆一様に兄弟同志である。フリー・メイソンの一人々々は各々石になぞらへて、其の石を以て銘々がソロモンス・テンブルを建設するのである。石には種々なるものがある。例へば磨き上げられたもの、又は山から掘り出した計りのものもあつて各々の石に種々なる表象を用ひられてある。これには二十三の階級があつて其の入會の時には或人は「こて」を貰ふ(石と石をつけるセメントを塗るといふ意味で社會道徳 Social virtue and

Social moral である)或は「定規」を貰ふ、又「のみ」と「槌」を貰ふこともある。又二十四吋の「尺」を貰ふ事もある。(二十四時間を意味したもので終日を完全に働くといふこと)又は「コンパス」を貰ふ者(之は完全を意味し、境を立て、其の行爲を律するといふ意)、「錘り」を貰ふ者(平等を意味するもの)等、各々表象を以て各々の石を磨き上げて斯くして一つの完全なるテンブルを建設せんとする所の主義である。彼等の祈りは宇宙の建設者の上に力を與へられんことを祈り、兄弟の平和調和を守つて謙遜に眞の愛に充ちた祈りである。この集會は一般には祕密會であつて會員以外の者は知る事は出来ぬ。この團體の起源も何時の頃よりか明らかに知る事は出来ぬが、石を表象とした所より考へても遠く石器時代のエジプトに起因して居るのではあるまいか。兎に角五千年前から二、三千年の間であることと思ふ。要するにこの團體が固定停滞する事なく、常に信仰に生きて進んだならば槌に活きた宗教であると思ふ。宗教のリヤリテイは即ち其所にあるので、遠くエジプトの宗教も、佛教の表象なる卍を見て、亦基督教の表象なる十字架を見て、各々の境遇、國情、個人に依つて其の色を異にするが、起原は唯一つ、このリヤリテイに生きるものである。若しそれぞれ宗教が固定して迷信に陥つたならば其の宗教の生命

は亡びるのである。

吾人も亦自由建設者なり

宗教の起原を想ひ、其のリヤリテイに達するならば茲に始めて信仰を建設する事が出来る。眞に宗教の根本を辿り、誠に信仰の土臺に立つた時、吾々は形式や、オーソリテイの束縛を感じない。吾々も一つのフリー・メーションである。吾々は從來の經驗を活かして此處に確信を置き、自ら信仰の根本に入つて行くならば其所に眞の宗教があり、些の矛盾もなく遂に永久の満足があるのである。私の信仰の建設の土臺は此所に置くのである。

神は其の時代の精神であり吾人の根本力である。吾人の意識に上らぬ無限の力―潜在意識―即ち内在の力である。人間の個人々々にこの内在の神が内にインスピレーションを與へ、信仰の爆發力を與へて、人は初めて實在を知るのである。其所に靈界の震動を受け、深き靈感が起るので、所謂神と吾々とが交通合體するのである。此の經驗は最早言葉で説明する事は出来ぬ。

要するに吾々の服従せんと欲する今日の神意は、今の眞要求であり、現世の眞大勢である。吾々の眞經典は毎日新たに内に

湧き出づるインスピレーションである。之は人間の直感であつて、心の眼を開いて視、心の耳を開いて聴くより外に言葉を以て定義を下す事は出来ぬ。が人間世界の實在であるから其の深き要求を實現する事に依つて證明するのである。吾人の宗教は即ち之である。故に昔の宗教に於て、祈りと云へば病氣の平癒を願ひ、自分勝手な幸福を願つたそれとは違ひ、こゝに云ふ祈りは吾々の宇宙に對する態度であつて、自己を捧ぐる事を謂ふのである。又自分が目的とする事を實現せんとするに當り十分にわが頭腦を鍛練し反覆し、其の意志が自然に言葉となつて溢れ出で、又行となつて現れる様に自ら自己に命令し、暗示するのも吾々の云ふ一種の祈りである。之をするには、自分の主義、自分の希望、或は其の日の目的を明らかにする助けの爲には他の凡ての經典等が已に消化し得たる其の時に適切なる言葉を抜萃し、或はもし眞意要點を己に適する己の言葉に書いてもよい。兎に角其の日々の目的を定め、之を自分一日の精神の糧とするのである。思ふに祈りと云ふ事は、宇宙靈界の震動を感受すべくその態度を作るのである。此の態度を以て眞に國家社會を思ひ、團體を思ひ、友を思ひ、この真心を以て相會するならば其の祈りは矢張靈海の波となつてわが隣人にその感化を傳へるのである。畢竟祈りの實行は自己實現である。神を讚美

して謳ふ歌も、啻に美しき音楽を機械的に唱へ或は聞くのではなく、眞に高尚なるインスピレーションのその眞情流露でなければならぬ。吾人が日中祈りの實行に努力し、夕にこの眞心よりの音楽を奏して安らげき寝につき、斯くして明日の門に入るといふは、眞に我等の櫻楓會員がフリー・メーンソンのやうに日々に宗教的生活を積み、日々に信仰の世界を建設して行くことである。

(「櫻楓會通信」第四十二號・校内會員修養會) 明治四十五年 四月

本校第十一回創立記念式を執行し

故評議員三井三郎助氏を懷ふ

今日は本校評議員大隈伯、久保田男、廣岡夫人及び三井男爵代理成瀬隆藏氏の御出席を得て、茲に本校第十一回創立記念式を舉行するに當り母校の爲めに創立當初から盡瘁された故評議員三井三郎助氏の追悼の意を表し度いと思ひます。

今日の女子大學が初めて此の形となつて此の地に生れましてから早滿十一ケ年になります、併しその以前に於て此の校設立の計畫を具体的に發表した年から數へると既に十七年と云ふ隨

分長い月日を経て來ました、それが尙其の以前に於て我が國の教育界に女子高等教育の種子が芽を出し初めた事を溯つて考へて見ると彼れこれ卅年にもなりません。

されば今日の女子大學が外部の形態と并に其の精神で有る校風が成り立つ迄には、非常に複雑なる原因と經驗を以て居るのであります、そこで今日の記念日に於て其の歴史を考へます事は、此の校風を養ふて行く上に大切な事であると信じます。恰かも吾々個人の品性は明瞭に意識して居る部分と又自らは意識しない所謂内在の意識に依つて、その性格傾向をつくつて居る様に學校も亦表面に現はれた形式と、現はれないで深い原因をなして居る所のものとがある、これが即ち學校の生命人格である。其の校風の感化指導に依つて、此の學校の教育主義が實の力となつて行くので有るが此の隠れたる人格、無形なる校風の感化力は勿論言葉で云ひ表す事は出来ませぬ、で私の今述べやうと考へて居るのは、只其の校風はどう云ふ種類を以て組み立つて居るか、深い土臺はどう云ふ原因から來て居るかと云ふ事を申して、それに依つて種々なる記憶を呼び起してみたいと思ふので有ります、我が校風は直接教育に關係ある教職員並に在學生に依つて本校の主義である自働自奮の精神を彩られて居る、併し此の學校の校風の深い根は唯そればかりではなく他に

今一つ忘れる事の出来ぬ有力なる要素がある、即ち最初の根となつた力は、此の學校を組織立て、世に紹介したる諸氏である、次に創立員、それから評議員諸君であります、故三井三郎助君は其の最初に於ては發起人となり、又創立委員、創立後は評議員となられて此の校風の根に盡されたる恩人で有ります、この創立記念會に氏の追悼會を併せ行ふといふ、そは故人の爲め將私共の爲に最も適當なる事と思ひます。

本校學生の夏期修養會の場所となつて居る輕井澤三泉寮は三井さんが設立せられたものであります、此の寮の名には種々の記念すべき意味を含んで居る。即ち三と云ふ數は、物の成立する場合に深い意味を以て居る、殊に我が校の設立の歴史には三といふ數字を以て記憶すべきものが澤山ある。

先づ此の女子大學の當初の發起人及び第二期の發起人、創立員となつて吾々と一所にこの擧の爲に御盡し下さつたのは、初め大阪に於て廣岡夫人、土倉庄三郎君、内海男爵の三人である、此の三人の方と本校創立の大体の計畫を御相談して、さていよ／＼之れを天下に公にする爲、東京に來て當時我國の須要の責任と識見を持つて居られる人々に此の意見と、計畫を齎らした。所が此の方々の中にも随分研究問題となりました。申す迄もなく其の當時の我が國に女子の爲に大學を設けるなどと云

ふ事は、随分冒險的な事業で有るにも拘らず、終に其の決心を表されて、今日の此の女子大學の起る運命を定められたる東京に於ける最初の發起人となられた方が三人でありました。之れは即ち大隈伯、伊藤公、西園寺侯で有るのであります。茲にいよ／＼大學を創立すると云ふ事に於ての必要を認め賛成を得てさて之れから之を設立する事に就て是非必要が起つて來るのは經濟の方面で有ります。此の道を立てられた方が三組ある、即ち三井家、岩崎家、住友家。次に財政を作るに最も無くてはならぬ實地募集にかゝつて下さつた森村翁と、澁澤男爵と、又創立の最も財政困難なる場合に其の必要なる財政を荷負つて立てたのは土倉庄三郎氏と廣岡夫人で有る、此の三組に依り學校の財政が成り立つた、夫れから此の教育上に就き組織上に就て細かい所に注意を拂ひ腹藏なく親切に注意を與へ小言をも云はれた、之れが又此の學校の發達の爲必要でありました、之即ち久保田男爵、内海男爵、故兒島維猷氏の御三人で有ります、此の方々には御性情に相似た所があつて細かい所に注意をして常に學校の爲に後見役をせられ随分八釜敷く云はれるが親切で始終一貫して此の學校の發達の爲、心を用ひて下さつた。數へ來ると此の學校の校風の根には種々なる働きと様々の努力を捧げられたるものが非常に多い。以上の原因が此の學校の校風を作る上

に明らかなる筋道で有るが尙隠れて居る原因即ちこの人々の人格によりて知らず識らず養はれたる校風が今日此の大學の眞の生命を組織して居るので有る。即ち女子大學の爲に盡された所の人々の人格の要素、尊敬すべき高潔なる志が此の學校の命の根を養ふて居る、其れ等の人々の中の一人として今茲に物故せられたる三井三郎助君を數へなければならぬ。

三郎助君は自分の徳を表明する事は好まれぬが、私共が今日肉體上の三井氏と永別するにつき隠れて居る人格、眼に見えぬ其の靈に接して最も學ぶべき所を取り是非失ふてならぬ意志を繼ぐ事は成すべき事で有り校風を養ふ上に最も大切なもので有ると思ひますから、私は今一言文け御話致し度いと思ひます。

三井さんの人格を作つて居つた大なる要素を三つあると思ふ。

第一、善は急い主義の人

第二、寡言實行の人

第三、虚名を嫌ふ人

で有りました、氏は自ら之れを自分の主義とすると云ふ事さへ唯黙つて行はれたる人で有りますから隠れたる徳とでも申されませうか、始終其の人格の陰に現はれて居る徳が氏の人格を明かに語つて居ります、一例を申せば、彼の輕井澤に三泉寮が建

られたと云ふ事の如きは、嘗て私が七八年前に非常に疲労を來した時、同地に參つて居つた事があります、其の時私は三井さんに「輕井澤は高燥の地で天然の景に富んで居る、若し一年の中僅かな時を割いても出来るならばこの様な土地で眞面目な精神上の生活を致したならば健康の爲にも有効で有りませう、わが校でも寮舎を設けたならば卒業生の爲にも有益で有る」と云ふ考へを話しました所が、三井さんは其の考へに賛成を表せられた様で有つた、けれども今直ぐさう云ふものを起さうと云ふやうな事は御互に話し及びませんが、其の翌年になつて三井さんは私に話されるのに「いつぞや話した輕井澤に女子大學の寮舎を作つて見た」と云はれました、私は其の意外なのに驚きました、且つ實は未だ學生を同地に連れて參る準備が出来て居なかつた位で私はまだ「將來の事として話したのに、三井さんは既にこの理想を實行に行ひ、輕井澤の土地を開いて適當の場所に適當な寮舎を建てられたので有りました。

又昨年のごとで有りましたが、三井さんは京都出の方で話が京都の事に及びました時、私は「京都市に櫻楓館の支部館を建て圖書館、参考室を建て度い、さうすれば京都の會員の爲に又あの地方の一般の家庭改善を進めて行く根據とする事が出来る」と話を出しました所が其の時、三井さんは直ぐと御自分の

土地の空いてる所に建てやうと相談せられていろ／＼と計畫を話されましたが其の後御病氣になられたので、着手は出来ませんでした。若し左もなくば今頃は或は最早や着手せられたで有りませう。

又これは未だ公にならぬ事で種々な計畫がありました。病床に就かれた爲に中止となつて居るものも澤山あります。

又人に對しては實に誠の人でありまして、三井さんに永く交際した人で誰ひとり悪い感じを懐いたものはない、下々の者に對しても實に情の篤い人で、例へば京都の三井さんの別荘に行くくと、八十になる老人が病氣になつて居るがこれには充分に看護の人をつけて置かれ、又鎌倉にも七十になる迄使はれた人がこれは先頃なくなりましたが、これ等の人の事から考へても、接する人の総てが中途で心を代へ、人を忘れ、友を離るゝ事の出来ぬ位真面目な方で有ります。この學校の事なども日頃注意を拂はれて、卒業生の傾向、校風の傾く所を始終氣にかけて少しでも善を聞けば喜び又悪い事は心から心配致されました。

氏は今年丁度六十三歳で既に子供も皆大きくなつて生涯の仕事は大抵形がつき何の不足もない一紳士として社會の尊敬を受けて逝かれた。この年に及んでも氏は一方に青年の意氣があつた方で、私は此學校の出来ぬ前から交際を致して居りましたが

其の頃から一週に一度宛宗教並に修養上の話をする時を作られ、一家高尚なる趣味を養はれたので有ります、其の後忙しくなつて出来ませんでした。病床に就かれましたも修養を怠らず、其の考へを會得して自分の主義を養ふて行かれました。此れ等は口には云はれませんが其の考へを必らず行ひの上に表はして居られ其の態度も常に進んで居られました、其の内面の深い生活に於て大に興味を持ち年と共に進むと云ふ主義が終りまで衰へなかつた事は敬服する外はありません、氏は何事も建設的人でありまして人に接してもいつも其の人の徳を建ることに深い興味を持たれました、此のやうなお方で有りますから従つて其の趣味も建設的のものが余程好きで有つた、本校の評議員としても其の創立の際には自ら建築員となられて此事に渡る迄自ら設計をなされた、其の櫻楓館も此の配慮に與つたものが多い。此の様な事は餘り他人の氣づかなかつた事で御自分の名を現はす事も嫌はれた許りでなく右の手でする事は左の手にも知らさぬ様にせられた位ですから隠れたる徳の何處迄あるかを想像することが出来なかつたので有ります。實に氏は建設の人、殊に人の徳を建て、人の感情を美しく活かして用ひられた方でありますから氏に接して恐らく氏を敵視する人は誰もなかつたと云ひ得られませう。此の建設の徳、寡言實行、誠實の

徳、善は急げ主義の良心の機敏、確乎たる判断力は三井氏の人格を作る要素で有ると感じます、この人の精神が矢張り今日迄校風を養ふて居る、殊に氏の終りの時に於て氏の徳を記念し、其の善い所を學びことに虚名を貪らず又毀譽褒貶を意としない其の職に只忠なる事、此等の諸点を吾々は今日の學校の記念と共に深く記念して養ひ度いと云ふ事を切に希望致します。

〔花紅葉〕第十號）明治四十五年四月

天賦性の發揚

天才とは何ぞや―天才の歴史的四つの解釋―天才の近代的解釋

釋―天賦性と教育―何れの人にも天賦性あり―教育に依りて發揚す―普通教育と専門教育―人の性質の三種の類型―普通人と天才との區別―目的と集注―目的の種類

“Of all the goods, I only know the keys.”

That open the solid doors within whose I vaults

His thunders sleep.”

(1)

世に多くの人の渴仰と興望を一身に集め、天地のあらゆる光

榮に圍繞せらるゝ天才、これは抑も如何なるものであらうか、古來この事に就いては種々なる解釋があるが、先づ茲に歴史的四つの解釋を上げて見よう。

▲偶像教の信仰せられた古代にあつては、天才は、人の生れた時から其の人を守護し、其の人の運命を定め、其の人の品性を造り、死に至つては其の魂を再び他界に導き行く守護神、之が即ち天才であるとした。彼のカーライルも「吾は吾が天才の導きに從つて己が運命の道を歩みたり」と云つて居る。

▲第二には天才は善惡二種の靈と思はれて居る。而して凡ての人は一生涯中、此の兩極端の二種の靈に付きまとはれて居るものと云ふ解釋である。彼のビタゴラス派の信仰は之であつた。ブルタークも亦「人は惡しき天才の爲に恐れを以て擾され、彼の徳を妨げられる」と云つて居る。

▲第三は天才とは、即ち之を國民又は時代に關して云へば、其の時代の思潮、輿論、感情、言語、法律、制度、又は是等のものが神話的人格化したるものである。

▲第四は天才とは特種の働きに適する爲に、自然が特別なる場合に特別なる人に賦與したる精神的能力である。彼の發明発見家、創始家の如き者をしてインスピレーションに依りて、或は實行の方面に、或は思索又は藝術の方面に、偉大なる人たらし

むる其の自然の能力を意味するものである。斯く人が非常なる場合、即ち非常なるインスピレーションを受けた時は、非常なる力が出づるもので、嘗ては夢にも考へなかつた事をも成し能ふものである。之を見て迷信深き古代にありては、此の驚くべき働きを爲すものを一種の靈、或はある神の如くに考へた事は、敢へて怪しむに足らない事であらう。

以上は天才の解釋を歴史的に述べたのであるが、さて之に就いての近代的解釋は如何なるものかを少しく述べて見ようと思ふ。

▲近代の心理學に従へば、天才とは人の潜在意識界に充滿する、一種の力の發現であつて、それが人の顯在域に働く思想感情を一層強める所のものである、と解釋する様になつた。國民性と個人性と其の何れを問はず、潜在意識の世界には、過去幾千萬年間あらゆる生存競争を爲し、之に勝利を得て生存を續けて居る力が潜んで居る。勿論此の中には悲しむべき動物的傾向の残存せるものがないが、先づ大體から云へば數萬年間の、試験の鐵火を通り來つたものであるから吾人が今日有する此の精神力は、最も精選されたものであるといふ事が出来る。然り凡ての生物中、人間は分化と結合の點に於て、最も發達したものと云ひ得るのである。即ち人は生れながらにして有

する多くの可能性を呼び醒して、之を一つの中心點に集め、尙刻々と進歩の階梯を踏みつゝあるのである。世の文明は人の可能性を複雑にし、教育は各自の可能性の發揮を助けて居る。然して累積せられたる潜在域のこの可能性は、若し境遇を與へらるゝ時あらば、無意識に自然に顯在域に突出し、驚くべき働きを爲して世人の賞讃を博せんとするの傾向を持つて居るものである。然り一個人でも一國でも、一朝危期に際してはこの偉大なる働きをなし得る力を持つて居るのである。彼の日露戰爭に於て、如何に貧弱に見えたる日本國民が、一度危急の場合に立ち至つた時、よく世界の強國を以て誇つたあの露帝國に勝ち得て、世界を震動せしめたではないか。尙日常の事にも此の例は屢々ある。纖弱な婦人が火災の場合等に遭遇すると、その子供や財産を救ふ爲に、普通には考へ能はざる力と、活動を現す事がある。之等隠れたる潜在力が突如として迸出し、其の全人格を一統するかの如き勢である。即ち人類の可能性は個人と云ふ衣に包まれて居るのである。例へば千里に互る森が、其の初め一つの檜の實に潜むと同様、これに或る境遇を與へたならば、其の潜勢力は忽ち芽を出すのである。然れば茲に至りては我に力ありや否やは最早問ふべき處ではない。問題になるものは、

之を發現せしむる境遇と時機である。

“I am the owner of the sphere,

Of the seven star and solar year,

Of Caesar's hand, and Plato's brain,

Of lord Christ's heart and Shakespear's strain.”

(11)

▲そこで教育上必要な事は、第一に青年に人々々々天賦性のある事を知らしめる事である。即ち彼等に、彼等は無限の過去より彼等に至る迄、累積したる傳來可能力の寶藏である、先天的に可能力を蓄へて居るものである事を信ぜしむるのみならず、眞に之を悟らしむる事である。

▲第二は其の寶藏を開く鍵を見出さしむる事である。教育は決して其の力を與へるのではなく、却つてこの力を發揚する鍵を授くるものである。天賦性を増減するものではなく、其の發揚に力あるものである。然らば如何にして其の精神力を發揚せしむべきか、其の方法は如何、と云ふ問題に立ち至らねばならぬ。

人類には共通なる根本的要素があるが、これを以て「人は凡て等しく作られたり」と云ふ事は又誤つた斷定である。一人一

人は幾分宛異つて居つて一人として等しいものはないと云ふ事は永久に事實であらう。譬ひ要素は單一で全般的であらうとも、彼等の取る形式は各自に獨特のものである。然り此の眞理は宇宙を通じて其の證明をして居る。同じ一枝の櫻の葉に、二葉と同じものがないやうに、動物にも亦同じ猫の子であつても凡てを同じうせるものは一つもない。同じ人間であつても一人として同じ性質、同じ境遇、同じ經驗を持つものは無いのである。人間生存の初めより、今に至る迄幾萬年繰返し／＼て、使用せられて居る其の要素は、幾度も／＼破られ、且つ築かれるけれども、其の度毎に一つとして同じものが二度と作られない。否其の度毎に、嘗て幾萬年にも現れた事のない新しいものとなつて生れて來るのである。之に依つて見れば教育の目的には二様の方法をとらねばならぬ、即ち普通(普通教育)と特殊(専門教育)とである。

▲教育は人の累積せる能力を、普遍的に進歩せしめ、合理的人格の完全なる發達を期さなければならぬ。之は人をして自然界に主人たらしめるのである。即ち壓迫する自然力の威赫に反抗して自身を保護し、防禦する爲の武器となるものを與ふるのである。第二に教育の狹義の目的は、専門教育即ち各自の特別な天職に對して、特別に教育を與ふるのである。即ち人は各自

に特性を持つて居るのであるから、其の天職も亦各自に別々で、決して之を他人が侵す事は出来ぬ。この故に専門教育の必要が起つて来る。

(III)

“Every clod feels a stir of might,

And instinct within it that reaches and tovers

And groping blindly above it for light,

Climbs to a soul, in grass and flowers.”

人類の潜在意識中にも亦自然に突出せんとする活動力即ち欲望、傾向、熱心、其れ自身の理想を満足に實現せざれば止まざるの渴望力を持つて居る。此の燃ゆるが如き我をも喰ひ盡さず熱心と、彼が一度其の目的に向つて猛進するの時、其の進路に何物をも恐れず凡てを壓倒して進む其の熱愛、即ち全く我を忘れて熱中する集注力、之が即ち天才である。此の天才こそ人をして驚異の眼を放たしむるものである。

ウルテールが彼の悲劇カタリナの五幕を一週間に書き終つたもこの集注の力であつた。彼は、若し熱心、集注なくば到底一年かゝつても出来ない事を能く數日にして完成せしむるものは實に此の集注である、即ち天才であると云うて居る。ローウエ

ルのヴィジョン・オブ・サー・ラウンフォールを書いた精力も亦この力であつた。即ち彼は何の準備もなかつたが不圖天籟の妙韻に感じ四十八時間一食一睡をもとらずして懸命に執筆したのがそれである。

眞や彼の此の傑作に對して讀者は一種の靈感を與へられる。實に偉人は斯くの如き驚くべき集注力を現すものである。然し人間の性には最下より最上迄に種々なる階段がある。

▲第一は衝動的の人である。其の活動は脅迫の念にからるゝにもあらず、自然に喜ばしき發表に出るのであるが、自然律に従つて唯低い欲望と本能の生活に満足して居る人である。例へば迷路に導かるゝ時があつても導かるゝ儘に容易い方をとつて行く、少しの障碍にも堪へられぬ人である。所謂樂天家で活動家である。時には非常な力を現す事もあるが、之は頼むべき力ではなくて何時、何處へ吹き去らるゝものか、あてにならぬのである。斯くの如き型の人に天才は其の驚くべき力を表さない。

▲第二は即ち他人の意見、社會の輿論又は生活の必要或は利益の爲に動く人であつて、自身の活動を自身で支配する事の出来ぬ人、勿論理想をも、目的をも持つて居ない人である。斯かる型の人を機械的、奴隸的生活の人といふ。其の情は涸れて一滴の霑ひもなく、さればとて高尚なる目的に向つて忘我の域に在

るでもない。即ち價值ある人間の生存を遂げつゝあるものは云へない人である。この人に向つて天才の發現をまつのは永久に無効である。

▲第三の類型は即ち意志の人である。彼は凡て自己の意志を以て行ふ人で、衝動的發動の人ではない。彼の活動は常に意志に従ひ、目的に従ひ、常に彼を高尙に導くものに、その何物をも捨てて之に従ふのである。勿論此所に達するには低き欲望を捨て、義理と人情の調和をはかり、四圍の壓迫に對して適當の處置を取つて行かなければならぬ。彼の精神、彼の境遇の統一を保つ爲に奮闘しなければならぬ。非常なる困難の道を歩まなければならぬ。然し彼は意志の人である。彼の意志の力は遂に暗黒の力に打ち勝つて最後の勝利を得る人である。彼の困難はやがて彼をして進歩の眞向に立たしむる楷梯である。故に彼が今日最も高しと思ふ所はやがて明日進む、より高き進歩の楷梯である。

“Whom, neither the shape of danger could dismay,

Nor dream of tender happiness betray,

Who, doomed to walk in company with pain,

Turned the necessity in to glorious gain.”

(四)

▲普通人と天才との區別は何によつて然るか——かの驚くべき天才の祕密は何處に藏するかを考へて見ると、即ち天才は唯強く訓練せられし意力である。此の意力は彼の人格の集注點である。即ち彼は祖先以來の遺傳なる凡ての傾向、凡ての欲望、凡ての習慣をして適當なる位置に於て働かしむる所の彼の人格的集注である。かゝる人は決して彼の心の王國を亂す力の侵入を許さない。常に目的の爲に集注して、高い願望に依つて低い願望を支配し、より大なる自我に依つて、より小なる自我を征服する人である。かくて彼の精神は安靜にして、而も常に進歩の状態に居る人である。他の一方即ち凡庸人の場合には等しく是等種々の潛勢力を有しながらも彼の薄弱なる意志はそれを適當に制御統一する事が出来ないのである。故に彼等の心の王土は常に無政府の如き状態にあつて、何等の希望もなく、熱心もなく、又集注もない有様である。然れば斯く心の王土にこの主權者を有すると否とに依つて、斯くの如き人格の差異を生ずるのである。驚くべき天才の祕密は唯この一點の差異である。即ち熱烈なる意志が凡ての困難を排して生涯の目的に向つて奮闘する其の鐵石心に在るのである。

然るに近代の青年教育は、彼等青年が根本的に必要なる彼の生涯の理想、目的及び彼の價値を認めしむることを閑却して、却つて低き野心を衝動し、あたかも有爲の頭腦をパンの問題に惱ましむるが如きは不思議なる傾向と云はねばならぬ。これ天才發現の境遇を與ふるものではない。然らば人間究竟の目的は果して何であらうか。これ青年にとつて第一に考へなければならぬ問題である。重大なる活問題である。

▲人間の社會に多くの階級があるやうに、人の目的にも種々な階段があることは自然である——例へば快樂、幸福、満足といふやうに種々に別れて居る——。併しながら我々の眞の目的は絶對的價値を實現せんが爲であつて、利益が伴ふ爲とか快樂を得らるゝが爲に目的を定めるのではない。例へば快樂の如きは、吾人の眞の理想とするものではない。それは快樂は部分的のもので、己の快樂を得んが爲に、屢々他人の快樂を犠牲に供するが如き事もある。然るに眞の幸福と云ふは斯かるものではない。即ち内面的生活の統一であつて所謂審美的價値を有するものである。換言すれば吾人の心中に完き統一を來し、精神上の完全なる美を現すものである。之が外面的生活に現れて即ち愛、友情、平和となりて、人間社會に於ける全き統一を來す。如上の目的を以てするが故にこれは絶對的價値を有するものと

云ふ事が出来る。その他、人は皆眞理の倫理的價値、美の審美的價値、善の意志的價値及び完全を渴望する進歩的價値、或は又人生を凡て包括する宗教的價値の如きものは人の取るべき目的の二、三である事を認むることが出来る。我々の熱烈なる意力が理想の絶對的價値を靈感し、完全を渴望し、其所に眞の統一を見出し外界との關係も平和に、宇宙の意志に合致した時吾人の天賦性は始めて發揚するものである。之を日々の生活に於て實現する事が眞の目的、眞の價値である。

▲學生が如上の理想を以て日々學んで行つたならば彼等の心は容易に調和し、彼等の人格は發揚しないでは居られない。彼等が自然界に立つて其のよく消化したる智慧は、最早自然と戰ふに非ずして能く之と親和するのである。境遇より壓迫を受けるのではなく、これと親しい關係を結ぶのである。精神上の同主義同目的を以て進むが故に、友情に於ても、愛に於ても、常に健全なる精神と活力を與へらるのである。之に依つて作られた校風、家庭、國家、社會は美しい清い關係である。堅固なる關係である。此の雰圍氣に於て初めて眞の進歩を成就せしむることが出来る。靜かに自然を友とし神と語つて大いなる慰安を受け、眞に價値ある人生を送る事が出来るのである。

我が親愛なる諸子、今や諸子が進歩せんとしてその高潮に達

した時、諸子は決して機械的、形式的教育に妨げらるゝことなく、同時に又生活問題にのみ精神を擾さるゝ事なく、諸子は諸子自身の主人となれ。諸子は機會の來らん事を恐れず、機會來らば直ちに掌握せんことを用意せよ。而して常に抱負ある人となれ。然らば諸子は自主の人となり、自己の境遇を容易に見出し、愉快なる自己の位置を見出し得ん。

“Tis as easy now for the heart to be true,

As for grass to be green on skies to be blue.”

〔花紅葉〕第九號) 明治四十五年五月

社會的人格及び其養成に就て

女子大學に於ては、毎年學年の始に、其の一學年間最も力を用ゐんとする倫理的中心點を定めて置いて、各生徒をして共に之を標準として修養せしむる事になつて居りますが、本學年の標準は、「社會的人格及び其の養成に就ての研究」といふ題であります。此の社會的人格を修養する事は、單に學生のみならず一般の婦人方にも必要でありますから、特に成瀬校長に乞ひて、校長が此の爲めに生徒にせられた講義の要領を筆記し、こゝに掲載する事としたのであります。(記者)

社會的人格とは何ぞや

凡そ人間は、此の社會を離れては一日も生活する事が出来ませんから、其の社會と調和する所の人格を養成する事は、何人にも必要であります。社會的人格といふのは、此の人格、即ち社會の目的と一致する所の人格といふ意味であります。

社會的人格の二方面

社會的人格の意義を一層委しく説明するには、二つの方面より觀察せねばならぬ。

第一、器械的社會關係

第二、精神的社會關係

此の二つの區別を立て、研究しないと、社會的人格の眞の意義を了解する事は出来ないで、或は犠牲の精神とか、又は公共的善とかの標準が曖昧になつて、時には矛盾が起り、日常生活の上に迷ひを生ずるに至ります。殊に今日の學生間には最も此の恐れがありますから、此の區別を十分明瞭しておく必要があります。

器械的社會關係とは何ぞや

器械的社會關係といふのは、物質的關係の事で、衣食住に關する一切の物も皆之に屬します。即ち形のある物に就ての關係であるから、空間的關係であり又擴がりの關係であります。そ

ここで、例へば一つの杯に水が充ちて居れば、それを他に明けかへない限りは他の水を充たすわけにゆかぬと同じく、一つの場所若くは地位を二人三人が同時に占領する事は出来ぬ。故に、此の器械的關係即ち物質的關係に於ては、我と人とが共に目的を達して満足する事が出来ないから、互に競争し排斥し合ふて、自己の爲めに他の侵入を防がねばならぬ事となります。

タイタニツク號の例を見よ

先頃大西洋で沈没の不幸に遭遇したタイタニツク號の如き、世界最大最近の巨船で最も進歩したる近世科學の力に作られたものでありますが、其の沈没の際、二千四百人の乗組員に對して救助のボートは僅に七八百人を乗せ得らるゝだけであつた。かゝる場合には、どうしてもボートに收容し得らるゝだけの人数しか救ふ事は出来ないから、全體が共に幸福を享けるといふわけには参りません。そこで先づ弱者即ち婦人と子供とを救ひました。此船には有名な學者、政治家、軍人、記者杯も居りましたが、何れも悲惨なる最期を遂げた。斯る場合には之を犠牲といひますが、犠牲といふ語は物質的關係から生じた語で、すべて物質關係商賣關係經濟關係といふ所には、一部に犠牲の生ずるを防ぐわけには行かないのであります。

力の平均によつて僅に平和を保つ

個人同士の関係のみではない、國家と國家との關係に於ても

さうである。今日の英國の領土は日没がないといはれる程廣いが、其の英國の廣いだけ他國の領土が狭められたわけである、日本も今日は六千萬の人口を有して居りますが、それが段々繁殖して行く時は、國內にばかり居られぬから據處なく外に出て衣食住の地を得なければならぬ。是に於てか競争が起り戦争が來る、スペインは是等の状態を指して適者生存といつて居りますが、之が即ち物質界の社會關係で已むを得ない次第であります。物質の欲求は無限に働くけれども、供給する所の物質それ自身には限りがあるから、勢ひ衝突矛盾が起らざるを得ぬ。そこで物質的關係即ち器械的關係といふものは力の平均といふ事によつて平和を保つ外ないのであります。

物質關係の調和は不可能なり

然らば、力の平均によつて各人が満足し、社會を理想的に改善し得る事が出来るかといふに、不可能であります。尤も之に就ては多くの學者が研究して、相互の利益を平均し又は貧富の調和を圖るため、或は共產主義とか、個人主義とか、社會主義とか、帝國主義とかを唱へ、又資本合同とか、職工同盟とかもやつて見るが、成程幾分の進歩を見る事は出来るけれども、萬人の利益を平均してすべての社會の人を満足せしめ平和主義者

のいふ如く全く干戈を收むる黄金時代が来るかといふに決してさうは行きません。何ぜかといへば、譲り合つて平均を保つのは、つまり自分の慾望に制限を加へて克己し忍耐して居るのであるから、眞に心から融合調和するのとは違ふからであります。そこで眞の理想的社會は、どうしても精神的關係の方面に求めなければならぬのであります。

精神的關係とは何ぞや

精神的關係は之を人格的關係と申しても宜しい。是ならば、物質のやうな空間的制限を超越して、即ち多くの人格が同時に同じ物を占領する事が出来る、同じ利益を平等に享ける事が出来る。吾人格と人格とが一つになつて所謂融合調和する事が出来る。此の關係に於ては、多が一になり一が多になり、幾千萬の人が何の衝突も矛盾もなしに融合統一する事が出来ます。

精神的關係の妙境

精神的關係が進歩し向上すれば、自分の利益は他人の利益となり、他人の利益は又自分の利益となる、自分の進歩は他人の進歩となり、他人の進歩は又自分の進歩となる。さうなると人に與ふれば與ふる程自分も人も共に富み、人の物を貰へば貰ふほど、人も自分も共に富む。そして、我も人も無限に其の自由を擴大し得るのであるから、衝突の起る筈がない。其の結果宇

宙と自分が一つになり、自分の精神の裡に社會も宇宙も包んでしまふ、そして他人も亦同じやうな状態になつて、各自幸福を享ける事が出来るのであります。

此の精神的社會關係が實現されて、其處に始めて天國が築かれ、黄金世界が現出し、四海の者が眞の兄弟姉妹の如くになつて、共に人生の幸福を味はふ事が出来るのであります。

社會的人格を養成する方法

社會的人格とはどんなものであるかといふ事は前に申したので、略お分りであらうと思ふが、然らば此の社會的人格は如何にして養成せらるゝかといふに、之には三つの種類がある、即ち次の通り、

第一、外より受くる感化によつて養はるゝもの

第二、内から起る自發力によつて養はるゝもの

第三、意識的即ち研究的に之を増進し行くもの

右の三項中、第一は範圍が非常に廣いから更に之を數個の細目に分けて説きませう。

外より受くる感化に養成せらるゝもの

(イ) 他人との共棲 他人と共に棲んで居れば、互に何等かの刺戟を與へ又互に感化を受くる事いふまでもない。

(ロ) 社會的制裁 多數人の中に棲息して居れば其處に自ら社

會的制裁といふものが出来て、一人の我儘な行動を牽制するやうになる、之によつて各自の我儘が直され、忍耐寛容などの徳が養はれるやうになる。

(ハ) 自我意識 自分の行動が他人の注目を受ける所からして、其處に自我意識といふものが起る、即ち我の人格、我の思想といふものに付意義を認めて來る。

(ニ) 社會的是認の行爲 社會の多數が通常善といひ正とする所の行爲は、其の社會多數の利益となり幸福となる所のもので、其の反對に、社會が悪とし不正とする行爲は社會の秩序を紊すとか平和を破るとかの行爲である、それで社會が是認する處の行爲をして居れば間違はない、そして我々の社會性は常に人の是認又は賛同を求め、成るべく不承知又は反對を避けんとする傾きを持つて居るもので、此の傾向を益々養ふ事は社會的人格を完成する上に必要な事である。一寸した例であるが、憂ひを帯びた顔色や意地の悪い態度で人に接すれば其の人は必ず不愉快を感じるに違ひない、人に不快の感を與へるやうな言語動作を發する者は、結局仲間外れにされて、遂に自分の不利益を來すやうになる。

(ホ) 他人に喜ばれんと欲す 誰でも人に喜ばれたい、嫌はれたくはない、中には始末におへない人物があつて、あの人は嫌

はれるのが望みなのではないかと思はれる種類の人も無いではないが、本心に立入れば決してさうでない、此の本性が社會的人格を完成する上に大切な事である、然らば如何なる事が最も多く喜ばれるかといふに、其一つは勇氣である、花は櫻木人は武士といふ諺も、武士が義の爲めには一命をも惜まない勇氣を贊美したもので、歐羅巴の紳士ゼツルンといふ語も英國の騎士ナイトから出たのである、意氣地の無い者は男でも女でも好まれない、次には愉快といふ事、次には幸福、愉快は氣分で幸福はその一層深い情緒である、是等は誰も好む所で、人と接するに顔色態度禮義言語等に注意せねばならぬといふのは、畢竟この喜ばれやうとの意味からである。斯ういふ細かい點にまで注意するのは矢張社會的人格を養ふ一つである。

(ヘ) 他の意志の我に及ぼす影響 他の一人或は團體の意志が吾々の人格を感化する力は非常に強いものである、吾々の心の内には良品性と共に惡癖邪念が存して居て、機會があれば芽を出すこと丁度花園の雜草のやうなものである、少しく監督を怠れば忽ち繁茂する、然し學校ならば善美なる校風、社會ならば立派な風俗、之が出来上つて居れば雜草邪念は萌え出づる餘地がない、萌えても直ちに摘み去られる、それで全體の氣風を立派に作るといふ事が何より大切であるが、全體を立派にするに

は、一人傑出した人が出て全體を感化し指導する程有力な方法はない。小鳥屋がカナリヤを飼ふに、聲の美しい一羽のカナリヤを他のカナリヤの近傍に置く、さうすると他のカナリヤは其の美しい聲を真似て段々によくなる、人間も之と同じであるから、一校一町一村に傑出した一人が出来たならば、他の全體に活を入れ、之を感化して大なる生命を生ずるに至る。

〔婦女新聞〕第六百二十六・八號 明治四十五年五月

諸子は永久に母校の娘である

今日は長谷場文部大臣の御臨場を請ひまして、父兄保證人諸君並に來賓諸君の深き同情の中に、大學部第九回、附屬高等女學校第十一回、豊明小學校第一回、豊明幼稚園第六回の卒業證書授與式を行ふことを得ましたのは吾々の深く感謝する所であり、且つ光榮と思ふ所であります。

女子高等教育の嚴寒

諸子第九回生が今日より四年前に始めて本校普通豫科並に英文豫科に御入りになりました當時、其年の卒業式施行の日は丁度校内の櫻が満開致して居りましたが、時ならぬ雪が降つて多

くの枝を折り、半ば開かうとして居ります多くの蕾を天死せしめた事は皆さんにも記憶に残つて居る事と思ひます、この非時の雪の爲に多くの蕾が天死致した事は其の當時の我が國の女子高等教育の傾きを豫め表象したかの様に感ぜられるので有ります、即ち其の當時は我が國の女子教育の最近旺盛を極めた時で、此の頃其の統計を調べて見ますと今から七八年前、即諸子が大學に入學せられる五六年前の我が國に於ける女子の教育、即高等女學校程度の教育を終つて大學、高等師範、其の他の專門學校に入學したる者の數は、千四百人で有りました。があなた方の御入りになりました頃は一千二百人に減少したので有ります。併し中等教育の方は益々旺盛となつて大に數を増加し毎年（一昨年迄）卒業生が平均五百名宛増加して居ります故に第九回生が大學部に入らるゝ頃は實に我が國女子高等教育の嚴寒とも云ふべき時でありました。其の中に於て其の寒き星霜を踏み母校の十年記の爲に盡し第二期第一回生たるの責任を完うして茲に卒業の榮を負はるゝ時となつたので有ります。

此の間に於ける一般の女子教育機關は如何と云ふに年々増加してお茶の水專攻科の如き、奈良の女子高等師範、或は西君が建てられた女子の專門學校、同志社女學校の專門部、其の他之れに類する此の大學の程度、設備に相似たる學校の設立を見る

と云ふ事は誠に喜ぶべきことで有つて畢竟社會の女子高等教育の要求が年々に旺んになりつゝある傾向を示すもので、入學生の數も諸子の入學せられた時が最低でありませう。今年の如きは大に回復し増加の傾きで有ります。本校に於ても大學部から高等女學校、小學校、幼稚園を通じて四百十九名の新入學者が有りました。斯くの如き女子高等教育の最も下火になつた時を通じて、よく忍びよく勉めて今日に至つた諸子卒業生は恰も今、春光麗はしき天地に開いた櫻の如き光榮を負ふべきものでありませう。今年の櫻が開らくや否や濕つばい蒸し勝ちな氣候に當てられた様に卒業生諸子が今母校を去らんとする時に於て諸子の母校は様々の哀愁に遭ふ事である、即ち母校が生れた當時から助力された三井三郎助君が逝去せられ、又香雪化學館を建てられた藤田傳三郎君も此の頃永眠されました、本校の評議員並に櫻楓會幹事森村菊子氏評議員岡部子爵母堂も生涯の實を結んで他界の人となりました。又各々斯道の爲に惜しむべき青山學院の本多氏明治學院の岸本氏陸相で有つた石本君の如きも近く頻々として他界せられました。

目的に進むべき階段

斯くの如く本年の卒業式は誠に濕っぽい空氣に満ちて居りま

す、吾々は今日櫻の花の席上に涙の露の滴る綠蔭の下にこの卒業證書を授與し、將來諸子の同情者と共に今後、行くべき道の方針を充分に感ぜんとして居るので有ります。此の日に於て私は諸子に如何なる告辭を贈るべきでありませうか。一片の訓辭の如きは生涯を律するに足りません、論語の如き、佛の經典の如き或はバイブルの如き又は世界人類の尊き經驗を抜き出した格言等も其儘是等を諸子に御渡し致したとて直に是を以て諸子が今後生涯の守神とするには不十分であらうと思ひます。其意味は云ふ迄もなく其中に眞意貴き教へを垂れられた所の聖人先輩が學ぶに足らぬと云ふのではない、其言葉を學ぶこと、形を描くことにのみ倣ひ慣れた末義を以て足れりとすることも出来ぬ、我々の身命を捧げ、我々の生涯を律して行くべき信念は宗派的宗教、教義的形式ではないと思ひます、其の中から常に銘々の要求する粹を撰ばなければならぬ、其の経験から自分の新らしい經驗を生み出して進まなければならない、其の言葉を鸚鵡的に朗讀すると云ふ事は今日の吾々の修養生活には不適當で有ると云ふ事を申したので有ります、故に今年の第九回生に贈らんとするものは、諸子が實驗使用したる彼の「新らしき修養日誌」で有る、此のノートの形式に現はれた考へは、實に今年卒業生に贈る告辭で有ると申すならば、諸子は其の眞意が

御わかりになるでせう。

自ら考へ、自ら決め、自ら書き記して御進みになる、此の日記は、實に今後皆さんが日々に新たな生活を送り、日々に新しい世界に進む入門で有ります、段々上の階段に昇る門戸、目的に進む明らかな道で有ります、私は諸子が此の門に入り此の道を進んで生涯の目的地に到達せられる事を切に祈るのであります。此の道に達する過程に就ては、既に日常に於て盡して居りますが、今日終りに臨んで、尙一言諸子の内的生活に於ける、經驗、習慣、道德の根本に就て少しく希望を述べて置く事に致します。即ち

第一 忍耐の徳

第二 寛容の徳

第三 愛又は友情の徳

此の階段は人類の根本生活たる宗教にも、學生々活の校風にも、各自の人格修養にも、同じく此の階段を辿らなければなりません。併し人生の根本を尋ねて見ますと、第一は宗教で有ります、そこで、此の宗教の生長發達の順序も亦明らかにこの三階段を踏んで居ります。

先づ忍耐は修養道德に入る最初の階段で、其の以前は互に惡み排斥し、人の信仰を破壊し、壓迫せんとし甚しきは宗教戰爭

ともなり、多くの血を流して居ります、これ古來の歴史を辿つて明らかに知る所で有ります。併し乍ら宗教の眞髓は人が互に相愛すると云ふ事で之の愛の主義から人間は其の信仰に矛盾が有る事を知りまして自ら制し、自ら克ち、互に相忍ぶと云ふ所が生じて參りました。

次に進んだ階段は寛容で、人間の思想の自由を重じ信仰の自由を相許すのであります、これは人間が相互の宗教に相通じた要素を見出して來た時、即ち稍々進んだ態度で有ります。今日東西の宗教が互に此の點を見出して相容れようとする傾向の有るのはこの原因に依るので有ります。

我が國に於て、近頃の問題となつた三教合同も、漸くこの階段の門戸を開いて此所迄進んだ様に思はれます。

又教育の方面に於ても此の階段は必ず経験するものであつて、例へば彼のチヨーチ、エリオットが、オクスフォード、ケンブリッジ、倫敦の三大學の校風を書いたものを見ても、此の間の消息を窺ふことが出来る。即ち「ケンブリッジ大學は教授も學生も他人の善事を擧げ、其の人格を尊敬し、互に人の美を好み、成功を祝すると云ふ傾向が有り、オクスフォード大學に於ては、誰れもが人を批評し、人の缺點を論じて居る。然るに倫敦大學に於ては、全體の一致融合、即ち大學と大學、大學と

他の學校、教師と學生、學生と學生との間に於て一致共同して、一つの組織の下に動いて居る」と云つて居ります。

之れを我が母校の十年の歴史に比べますと、始めに於ては忍耐、批評、忠告と云ふ事が盛んで有つたが、此の頃に於て人の成功を喜び、人の進歩に同情すると云ふ第二階段迄進む事が出来た様に思はれます、併し高等教育も、校風も、品性ももう一段高調に達せんければ満足は出来ません。即ち全體の融合、同情、愛の動機から動くと思ふ所に迄達せんければならぬと思ひます。今日の思想界にこの第二階段即ち宗教に於ては從來の佛教の中にも、基督教の中にも、其の他の總ての宗教に通じて其の眞髓を取つて相容れ相進むと云ふ時代に至つたので有りません。併し乍ら之れ知識の上に止つて居つて未だ夫れが眞の活動となり生命となり愛となる所の第三階段には未だ達して居らぬと云はなければなりません。

永久の信念

吾々の多くは子供時代に於て、儒教、佛教の精神を以て育てられ、最近基督教の精神を鼓吹せられたので有ります。斯く吾々の血液の中には、佛教も、儒教も基督教も要素と成つて、今日の我々の一つの生命となり信仰となつて居ります、此の精

神が我々の日常生活となり、校風となつて居るので有ります。彼の基督教に於て、父と、子と、聖靈を三位一體と致す様に吾々は基督教、佛教、儒教を一つとし、我々精神上の種とすべき時代を建設しなければならぬ。此の精神を以て、友人と友人、國家と國家、更らに宇宙的關係を保たんとして居るので有ります。我が教育勸語の眞意も、此所に有るものと推察する事が出来る。諸子は本校に於て發揚せられたるこの精神は、今後櫻楓會に於て、益々培はれ育つべきであらう。諸子が此の精神を永久に續け行かると、事に依つて「諸子は永久に母校の娘で有る」私は今此の言葉を以て、今年の卒業生に告辭と致します。願くば永久に記憶せられんことを切に望む所であります。（文責在記者）

〔花紅葉〕第十號・卒業式告辭

社會的人格の養成

社會的人格とは何ぞや

社會的と云ふ冠詞が十九世紀に於て極端に用ひられるやうになつた。之は茲に其の種類を挙げると數限りもないが、社會的人格の養成と云ふ時にはどうすればよいかと云ふと、即ち社會

的行爲といふ事が必要になる。社會的行爲とは社會の目的を自分の行爲の目的とすると云ふ事で、然らば其の社會の目的とは何であるかと云ふ事になる。先づこれに就いて少しく申述べて見ると

社會の見方

從來は社會の目的を公共的善といふ事に置いて居た。ミルの所謂最大多數の最大幸福といふ事である。併し今日では最早この詞では説明が不充分になつて來たのである。何となればこれは十九世紀に於て科學全盛の時代、云ひ換ふれば實利主義の盛んなる時に宇宙の凡てを物質的關係、器械的關係であると説いた時代に起つた言葉であつて、今日は既にこの社會の關係が物質的關係ばかりでなく、何物か他に現象のあることを辨へて來た。即ち精進的經驗をば説明するにはこの言葉では不充分となつたと申すのである。例へば個人主義と社會主義と、修養と勉強と、自分の利益と公共の利益、相衝突する様に考へらるゝ場合があるのである。否考へらるゝばかりでなく、器械的關係を以て説明する時は必ず社會と個人と衝突を免れないのである。これは後に詳しく解説するとして――、さて社會といふものはどういふものであるかと云ふに、今日迄も様々な説き明しを試

みられた。即ち生物學上よりは之を有機體の如く説き、或は前述の如く物質的關係に、或は又社會といふものは只詞の上に存するもので抽象的のものであるとも云ひ、一方には又社會に重きを見て個人は社會の產物であるとも考へるものもある。が最近の説明の仕方は先づ社會を二方面から觀察して説き明すのである。即ち一は器械的關係とし、二は精進的關係とする。此の二ツの區別を明瞭に研究しないと此所に云ふ社會的人格の眞意を了解する事は出來ないので或は犧牲の精神とか、又は公共的善の標準が曖昧になつて、時に矛盾が起り、日常生活の上に迷ひを生ずるのである。

器械的社會關係

器械的關係とは物質的關係で、之を人間で云へば健康上に必要なる一切の物質の關係であるから、これは空間の關係であり、延長の關係である。故に二ツの物質は同時に同所を占領する事の出來ないものである。この物質關係では吾と人とが合一する事が出來ぬのみか、其の反對に互に排斥しなければならぬ。其の個體の利益の爲に他の侵入を防がねばならぬ事となるのである。即ち吾々の精神は身體といふ物質の中に入つて居るから其の利害は他と一致しない、我が利用せんとするものは他

人の使用を減じなければならぬといふやうな事になるのである。例へば先頃大西洋で沈没の不幸に遭つたタイタニック號の如き、世界最大最近の巨船で、最も進歩した最新科學の力で造られたものであるが、其の沈没の際二千四百人の乗組員に對して救助のボートは僅に七八百人を乗せ得らるる丈けであつた。斯かる場合にはどうしてもボートに収容し得らるゝ丈けの人数しか救ふ事が出来ぬから全體が共に幸福を享けるといふわけにはゆかない。そこで先づ弱い者即ち婦人と子供を救つた。この船には有名なる學者、政治家、軍人、記者なども居つたが、何れも悲惨なる最後を遂げた。斯かる場合には之を犠牲と云ふが、犠牲といふ語は物質的關係から生じた言葉で、すべて物質的關係、經濟關係、商賣關係には一部に犠牲の生ずるを防ぐわけには行かない。でなければ競争といふ事が起つてくる。之は一個人の關係許りでなく國家と國家との關係に於ても然うである。今日の英國の領土は日没がないと云はれる程廣いが、其の英國の領土の廣い丈け他國の領土が狭められたわけである。日本も今日は六千萬の人口を有して居るが、尙繁殖して行く時は、國內にばかり住まはれぬから、勢ひ外に出て衣食住の道を得なければならぬ。此所に於てか競争が起り、戦争が起る。スペインは之等の状態を指して適者生存といつて居るが、之物質界の

社會關係で止むを得ない事である。併しながら唯この適者生存の法則を以て人間社會を律して行かれるかと云ふとさうはいかぬ。物質的關係は無限に働き得るが、夫れに供給する處の物質には制限がある。そこで學者は様々の方法を講じて力の平均を試みたが、個人主義が起れば之に對して社會主義が起り、又帝國主義が起り、其の結果も矢張り萬人の利益を平等にする事は出来ぬ。勢ひ衝突矛盾が起らざるを得ない。でなければ畢竟力の平均といふことは相互に譲り合ふといふ事、即ち犠牲の精神を以て自分の爲には幾何か損になつても人の爲に譲るといふ事をしなければ、物質の過不及のないやうには出来ぬ。

人間が精神界を見出すと同時に物質的關係ばかりではいけない。眞の理想的社會はどうしても精神的關係の方面に求めなければならぬと云ふ事に心づいた。

精神的社會關係

精神的關係は之を人格的關係と云つても宜しい、即ち社會的人格の根本問題である。この問題を明らかにするには唯常識を以てのみでは解し難い。豫め時間及び空間の制限を超越して哲學的に考究して行かなければならぬ。哲學といふと偏見をもつ人があるかも知れぬが、併しこの今日の要求して居る信仰問題

即ち精神生活の経験を充實せしむる爲には是非ともこの方法に依らなければならぬ。そこで先づこの問題に入る前に、何故に常識では判断出来ぬか、又何故に哲學的であらなければならぬかを一言しよう。

知識の二方面

吾々の知識を二分して常識的、科學的知識、及び哲學的、形而上學的の知識と分つことが出来る。

第一に屬するものは形而下のもので事實的のものである。觀察、實驗、事實の分類、證明等これに屬するもので、これを研究するには組織的に、正確に、全體に互つて統一の方法をとる科學である。云ひ換ふれば時間空間的に排列したところの順序規律等を鮮明に記述する學問である。この方法が組織的となり、部分的となり、自然的となり、習慣的となつたものを常識といふのである。

第二に屬するものは本體的即ち事實の意義、事實の價值、或は目的の知識、事實の眞髓の知識即ち哲學であつて、科學的常識が、確定した所の其の事實の説明、その事實の關係、意義、目的、價值等を研究する學問であるが、この哲學にも亦二方面がある。分析的及び批判的と、綜合的及び積極的とである。即

ち内面的本性に土臺を置き、経験全體を取り扱ふ所の實體の學問であり、宇宙の生命、全意識の學問である、或は全價値の學問である。哲學は我々が直接に見る面の出来ぬ數十年前、數萬年前の出来事、又我が國を離れた米國、英國、獨逸といふ様な所のものも皆考の中に組立て、來るのである。尙將來ある十萬年後の事迄も想像するのである。

哲學に對する經驗

斯くの如き高尚なる學問、斯くの如き數十萬年の過去及び未來の事を如何にして直接に經驗し如何にしてその卓見を持ち得るか。又凡ての階級に居る人間の何れもが此の如き問題に興味を持ち得るか否かと云ふ問題が起るのであらう。私は今之に答ふるに私自身の経験を云ふ事が最も適切であると考へる。

私は幼少にして母に先だゝれた時「母は未だ此の世に居るものではないか」「自分は何の爲に生まれて來たものか」「人間は終ひには何處に行くのであらうか」といふ問題が起つた。之が即ち子供の哲學問題で、年をとるに従つてこの心が往來して止まない。彼の野蠻時代の人間の哲學は今日の所謂神話である。故に哲學は唯學者のするものではなく、子供も野蠻人も凡ての人が宗教を持つて居るやうに、哲學思想は誰の頭の中にも

起るのである。而もこの解決をつけなければ根本の満足は出来ないものである。哲學は凡ての學問、文學、宗教の根柢となるものである。

近世哲學の傾向

近世哲學の泰斗ベルグソン (フランス) オイケン (ドイツ) は時間及び空間といふ事に就きて下記の如き哲學觀を發表して居る。即ちベルグソン——「内なる自我、内面自我に於ては相互の延長なき持續といふものがあり、外部的自我即ち純粹の空間に於ては眞に持續なき相互的外部關係がある」、即ち「實在は決して分量或は同時に起つた事柄の總和にはあらず」と。彼は社會は只人間を集め來つた所の總和ではない、と云ふ事の爲に時間及び空間の關係を斯くの如くに説明したのである。一言で云へば時間空間は實體ではない現象であると云ふのである。又「空間の觀念はどうして出来るか——之は心の統一的綜合的作用より出来るのである。即ち時間は外界内界を経験する所の形式に他ならず、この經驗の對象なる事物相互の關係から起る主觀的の產物である」と、これに依つて從來解き得なかつた世界宇宙の多くの二律背反が解釋されるのである。次に、オイケンの時間空間に對する考は、「意識は時間空間を超越

したものである。併しこの經驗を超越するに非ず——吾々が自由である、自動であると云ふと同時に、その束縛を感じ制限を覺ゆるのは何であるかと云ふと、之は即ち時間空間である。この制限を離れて初めて人間は自由である」と。

社會的人格の内容

さて、以上は學說であるが、之を吾人の精神生活に應用した方面を云つてみるならば、即ち社會的人格關係は器械的關係に反して時間と空間を超越して居るから各個人の要求、利害、目的、價值、幸福が相調和一致するのみでなく、相助け、相容れ、相和し、相進めると云ふ様な働きとなつて來るのである。故に精神的社會人格即ち各個人は互に孤立する事を許さぬ。共に依つて相互に融合し、相結ぶと云ふ事が相互の經驗を保存して向上、完全、信仰に入るので有る。繰返して云へば多くの人格が同時に同じ物を占領する事が出来る。同じ利益を平等に受ける事が出来る。否人格と人格とが一つになつて幾千萬の人が何の衝突矛盾もなしに融合統一し、かくて各個人の世界は擴大され、その人格は強大となり、其の經驗は益々充實するので有る。そこで

第一吾人が精神生活に成功しよう、根本生活に満足を得よ

う、云ひ換ふれば吾々が眞の自由を得ようと云ふならば一切の機械的束縛に勝たなければならぬ。この機械的束縛といふは何であるかと云ふと、事實の時間的關係、即ち現在の中に刻々と逃れ行く時間の制限を超越して、精神的に自由の境に在る事である。

第二には過去の經驗、過去の事實を現在直接の經驗の如く再び之に價値をつけ、生きたる經驗即ち常住人生の價値に復活せしむるのである。即ち史的の價値を復活せしめて人類全體の經驗を銘々の所有とする事、即ち歴史を永久的精神的現在とするのである。

故に吾人は古來人類の經驗及び過去の偉人、人格を今日吾人の所有となす事が出来る。其の人格をオイケンに内面的完成或は内面的統一と解いて居る。この豊富な複雑な中にある統一と云ふものが、即ち吾々の尊い人格である。人格とは何ぞやと云へば無数の統一である。所謂時間空間を超越した所に無数の關係がある。夫れを統一したものである。故に我々は過去の經驗、將來の希望等の總てを統一した所、茲に人格が有り、人生があり、永久不滅の價値があるのである。

オイケンの此の精神的生命の發見、ベルグソンの哲學上の發見は今日の科學、生物學、社會學及び宗教文學等あらゆる思想

界に大影響を及ぼして茲に社會的人格觀にも一大光明を與へたのである。

〔花紅葉〕第十號 明治四十五年六月

臣民至誠の聲

聖上御不例に就いて

聖上陛下 御不豫の御事は舉國六千萬臣民の恐懼措く處を知らず、唯至誠以て御平癒を祈る次第である。予は本日（廿三日）日本女子大學校並びに櫻楓會を代表して參内御見舞申上げたるが幸に御容體稍々御良好と拜承することを得るは國民一同の喜びに堪へない事である。併し何れにしても御重患に渡らせらるゝこの場合に、予はたとひ公の爲とは云へ、陛下の地を離れて海外に向ふと云ふ今度の企てに就いては逡巡として決してなかつた次第である。

併しながら又深く考へ奉れば 陛下には過ぐる卅七年頃より御宿痾あらせられしにも拘はせられず、嘗て嚴冬の寒さにも、三伏の炎熱にも、避寒避暑の爲に一步も宮城を出でさせ給はず、日夜叡慮を國家の前途にそゝがせ給ひ、萬機を御親覽遊ばさるゝ御精勵は、畏れながら拜察し奉るに、明治の偉業漸く完

成したりとは云へ、未だ外交、内政、民心の歸趨と、交々宸襟を惱ませ奉る事多く、之等國家の事を、須臾も忘れさせ給はぬ大御心である。されば 陛下の臣にして假令一刻たりとも手を無うし、足を止めてはならぬ。至誠以て宸襟を休め奉らん事、これ我等の奉仕する臣民の務めである。これを思へば今 陛下の御重患に際し 陛下の地を離るゝ事は恰も戰場に立ちたる心を以て、予は出發しなければならぬと決心した次第である。

此の際云ふ迄もなくわが櫻楓會員並びに學生諸子は深く大御心を感じ奉つて、眞に御宸襟を休め奉るやう奮勵しなければならぬ。各自がその務めに忠なる事は即ち 陛下の臣として奉仕する事である。今我等は、九重遠く將た 陛下の地を離るゝとも、時と場所とを超越して 陛下の臣たる務めを盡し、遙かに願はくは此の儘御輕快に進ませ給はん事を祈るものである。

——文責在記者

〔「家庭週報」第百九十三號〕 明治四十五年六月

家庭週報の再刊に就きて

家庭週報の創刊は今既既に九年の昔、明治三十七年六月二十五日恰も 東宮妃殿下の御誕辰に當りてその第一號を出したの

である。是より先き櫻楓會の組織せらるゝや、夙に其の機關雜誌の必要を認めて居つたのであるが、此の年四月第一回の卒業生を校門より送り出せるに及び、或は家庭に、或は教育に、或は社會に、各々其の重き任務に就きたる會員の爲益々機關雜誌の必要を感じたので、遂に家庭週報公刊の運びに至つたのである。又一方には母校教育の精神を發揮する爲に會員の修養に資し、進歩を助くる必要があり、一方には社會に對して我等の理想とするところ、主義とするところを紹介する必要を認めたので、家庭週報は是等の使命を有して生れ出たのである。

最初は隔週一回の發行であつたが、三年の後自然の要求に促されて、毎週一回の發行に進んだのである。蓋し婦人の手になれる婦人雜誌は恐らくは此の家庭週報の外にはなかつたので、現今でも全然婦人の經營になれる雜誌は餘り現れて居ないと思ふ。最初は經驗の無い學校を出たばかりの婦人の手で、果して讀者に満足を與ふところの雜誌を作ることが出来るかと、心竊かに危ぶんで居つた。之に加へて家庭週報は自己の使命を尊重するが爲、滔々たる婦人雜誌の壟に倣うて流俗に媚び時好に投ずるやうな記事は一切載せない。寧ろかゝる風潮に反對の態度を執つて、高尚なる趣味と健全なる思想を鼓吹することに努め、家庭の改善婦人の進歩の爲に益友たらんことを期したの

で、少し堅苦しいやうな傾きもあつたのであるが、年を経るに従ひ本誌の精神抱負が社會に認められ、漸々一般讀者の數も増加して來たのである。記者の立場から見てもます／＼其の經驗の加はるに従ひ、社會の實際に通じ、其の真相を曉るにつれて、紙面の改善も行はれ、前途發展の希望洋々たるものを認めて來たのである。

然るに四十二年四月櫻楓會の發展は、大學擴張の事業を始めるの機運に到着して、女子大學講義を發行するに至つたので、從來の家庭週報はこゝに家庭と改題して一面には大學擴張事業の機關たる性質をも帶ぶるに至り、これと共に發行度數も毎月一回となり純然たる雜誌體に改めて今日に至つたのである。しかし毎月一回では讀者の要求に満足を與ふることが不十分であるとの聲が段々に高まり、従前の如く毎週發行の希望が會員の間におこつて來たので、今回再び家庭週報を再刊することに決したのである、これが家庭週報再刊の來歴である。

方今社會の形勢を觀するに、久しく一世を風靡したる物質主義も、深く人心の間に瀰漫したる功利主義も、今や弊端百出して殆ど收拾すべからざる状態に立ち至り、餘毒は社會の各方面に浸潤して居る。従つて思想界の渾沌は殆ど名狀すべからざるものがある。道徳も權威の中心を失ひ宗教も信仰の根柢を破ら

れ、形式は無視せられ、習慣は蹂躪せられ、綱紀頹敗して、不健全なる思想は社會に横溢して居るのである。是舊きものは既に人心を維ぐの力なきに拘はらず、之に替るべき新しきものが與へられない當然の結果ではあるまいか、渴するものに與ふる水なく、餓ゑたるものに與ふるパンなきは恐るべき人心の危機を來すのである。先輩の識者でも尙且惑ふところがあるのであるから、後進の青年が向ふところを辨せずして、滔々相率いて岐路に迷うて居るのは無理はないのである。或は懊惱煩悶して遂に絶望自棄の淵に沈み行くものもある。或は放縱不羈規律もなく節制もなく危険の思想に走るものもある。淫靡遊情に溺るゝものもある。かくの如くして勢の趣くところに放任しておくならば社會の危機は招かずして來るのである。苟くも國を憂ふる心を有するものは、政治家でも、教育家でも、宗教家でも、此の機微なる人心の歸向するところを察して深く慮らねばならぬ大切な秋である。

吾人は深く信ず、かゝる人心の危機に際しては、たゞ繩墨的敎訓や、規矩的戒律のみにては、到底時弊を匡正し人心を救済するの力はない。根本的に人生の眞意義を悟らしめ、國家の眞目的を知らしめて人心の奥底に潜める信念に觸れるところの生命を與へなければ眞生の救ひにはならないのである。茲に至つ

て我等は女子教育の最も大切にして急務なるを思ふのである。誠や國の基は家に在り。家の礎は女子に在り。女子教育は教育中の根本教育といふも決して過言ではないのである。我等が技能藝術を以て教育の全價値となさず、大いに人格教育を高調するのは、此の根本教育に於て生命ある人格を作らんが爲である。女子の人格が高まり其の思想が高まつて來なければ家庭の健全なることを望むことは出來ないのである。家庭が健全でないならば社會の健全なるを望むことは出來ないのである。

我等は今家庭週報の再刊に際して、端なく現代人心の危機に想到し、切に家庭週報の使命の重大なるを感ずるのである。本校教育の精神主義は本誌に於て洽なく社會に普及されねばならぬのである。而も其の再刊は初刊と同じく再び、東宮妃殿下の御誕辰に際會したのである。殿下には近く我が校に行啓あらせられて、我等に無上の光榮と絶大なる御獎勵を賜つたのである。家庭週報たるもの假令微力なりとは云へ、深く殿下の御心に感奮して奉公の誠を致さねばならぬ。我等は家庭週報が斯かる重大なる使命と任務を自覺して健全に發達せんことを祈りて止まざるものである。

（「家庭週報」第百九十一號）明治四十五年六月

東西の握手

歸一協會の成立と世界的關係

曩きに「歸一協會の成立」に就いては本紙並びに諸新聞にも掲載せられたる所もあるから、その大體の意味に於ては既に云ふべき必要もないが、尙予は特に會員讀者諸子に一言添へたいと考へて居つた。且又予は數日を出でずして歐米巡遊の途に就くことであるから、従つて暫く本紙上に於て諸子と相見るべき機會も少なくなるであらうと考ふるが故に、茲には歸一協會成立の次第と並びに現今世界的關係はどうなつて居るかと云ふ事に就いていさゝか述べて置きたいと思ふ。

是迄の社會状態は人間の知識が狭かつたのと、従つて經驗が局部に限られて生活が狹隘であつた爲に、社會的關係を有する人間生活の上に矛盾衝突、暗黒、無智といふこと即ち從來の言葉でいふと、罪惡に支配さるゝ場合が多かつた。故にその理想は高く、是に達しようとする根本的要求は非常に深かつたけれども、これを實現することは殆ど不可能である。つまり人間といふものは一種の運命に捉はれてそれを脱することの出來ない所謂古來宿命説など云ふものが學者の間にも信じられ來つた

のである。

宗教も「人間の運命は如何ともする事は出来ぬが、これを救ひ之に慰安を與ふる」といふ事を以て極度の使命として居つた。併し其の宗教それ自らさへ自ら祭る神に矛盾があつた。例へば善の神あれば一方に惡の神があつた。一宗教ですら惡魔といふやうな靈があつて、其れとは決して調和が出来ないもので戰爭が永久に續いて居つた。まして人間は矢張り善惡の兩方面に分列矛盾して一方に神に救はれたる者、或は神の子といふに反して、惡魔の子、異邦人、異人種、惡人と云ふやうに相容れないものとなつて居つた。即ち救はれたものと救はれざるもの、極樂に行くものと地獄に行くもの、自分は神の子で、自己と宗教の異つたものは惡魔の子として互に相和せず排斥するものであつた。

尙近くは自分の心にも相容れぬ二つの靈があると考へた。即ち肉體と精神とは互に矛盾するものであつて、眞に心の自由を得んとすれば肉體の欲望を殺さなければならぬ。修養といふ事は肉體の欲望を減ずる事であるとか考へられたものである。

併し其れ等の單純なる思想より起る實際生活上の矛盾、或は近來の科學進歩の思想上に及ぼす影響は眞偽を絶對に追究して止まず、或は一元論、二元論、多元論の諸説起り、懷疑蟻ら

二律背反して遂に經倫道德の統一歸趨を失ふやうになつた。

これが今日迄の宗教、眞理、生活に起つて來る矛盾衝突であつて、其の調和其の歸一を得なかつた爲に人間が苦悶し苦悶したので、之を罪といひ、死といひ、昏きといひ、奴隸といつた。此の生活の上には自由の天地が闕けなかつたのである。

所が今茲に、其の暗黒時代、懷疑時代が極度に達して第二の發展の曙光が現れんとする時代となつたのである。といふのは從來二つの相反對したるものは決して永久に相反するものではなく矛盾するものではない。互に相合し相容れて其所に大調和大融合があつて遂に歸一するものであるといふ事が解つて來た。即ち敵が味方となり毒は藥となり、滅ぼさんとするものは自分に入用のもので、それを以て生活を豊富にすることになる。茲に於て宗教は自分に無いものを他人から貰ひ、自分の持つて居る信仰は人に與へるといふ事が傳道の意味となつて來た。異邦人、異人種、宗教の特色といふ事を以て相敵視する時代は去つて、世界の平和とか、國際的理想關係とか、諸宗教の涵養とか、人種間の親睦といふ事は單に理想に非ずして、之が實に宇宙の眞理であり、世界活動の大目的であるといふ事が解つて、其の事實も最早其所に現れんとして居る。この大勢から生れ出た今年の歸一協會等も其の一現象である。

×

歸一協會の意見書を見、其の綱領目的を讀んだ人の中には『斯くの如き目的は到底云ふべくして行はれ難い事である』とか、又は『理想には違ひはないが實現せらるゝ日は遠き將來であらう。今我々の時代に其の結果を見る事は出来ぬ』といふ批評を試むる人があるといふ事を聞いて居るが、成程眞にこの事は最も根本的なる又最も永久的なる大事業であるから無論一朝一夕にして成るものではない。けれども歸一協會は之を立てる發起人が人工的に作り出すといふやうなものではなくして、既に世界の大勢が斯くの如くなつて其の一現象として表れ來たものである。今日世界の指導者たるもの、頭腦には、この思想が根本生活となつて一身を支配し而して世界大勢を構成して居るのである。故にこの傾向は一個人の事業に非ずして我々個人がこれに一身を捧げたのである。云ひ換ふれば自ら決心して此の大勢に加はつたのである。今日この會の會員となつて居る人は殆ど四十人に達せんとして居るが、此等の人々は何れも皆期せずして相集り、相合したやうな勢であるのである。

さて、いよ／＼この會が宣言書になり其の團結を見るに至つたのは本年五月の終りから六月に入つた時であつた。然るに茲

に又期せずして同現象が歐米の天地にも起つたのである。即ち六月某日歸一協會員第一例會の日にも恰も歸一協會と殆ど同目的を有し、同主義主張を抱き、同事業の研究を企つる具體案が、英國の倫敦に於て成立した報道を齎したのである。昨年倫敦に於て世界人種議會が開かれた時の報告書は大冊の書物となつて出版せられたが、其の時は今日の大勢が未だ具體案と成るに至らずして其れが世界各國の要求として發表せられてあつたが、今日は其の要求が既に具體的となつて、而も東西期せずして恰も兩々其の組織を模倣したるかの如く、凡ての點に於て相一致して居るのであつた。

倫敦に於ける同會の表象をコンコーデヤ (Concordia) と云うて居る。其の名に於て既に我が國語の『歸一』英語の『ロゴス』東洋の『ヨガ』といふが如き皆音を異にした同意味の言葉である。即ち東洋より西洋に向つて手を出した時恰も西洋に於ても東洋に向つて手を差出して互に握手すべき時が偶然茲に一致した次第である。否偶然ではない、無線電信に依つて傳へられたる天の聲である。進めといふその聲の震動に同時に觸れたのである。この震動に觸れて東西の大勢は精神上に於て握手したのである。これが世界の精神界の交通であつて、現時の精神的要求であるのである。

倫敦のコンコーデヤに於ても其の會員は、彼の國の議員政治家其の他何れも社會に重要な位置を占めたる人々である。其の中には、矢張り我が歸一協會と等しく評議員などの役員を置かれてある事も同じである。然して其の表象を見ると、又よく其の思想の傾向が彼我相合致して居る事を思はざるを得ない。

即ち彼の表象は、地球の上に東西の人が握手して居る所が描いてある。即ち今日の大勢はどうしても其所に歸一しなければならぬので、今日この傾向に進んで居ることはこの點に於ても事實を證明して居るのである。尙このコンコーデヤの組織を今少しく詳細に紹介して事實に於て首肯し得べき證明を試みようと思ふ。

X

コンコーデヤの目的とする所は既に前述したやうで、凡ての差別——即ち人種、言語、習慣、宗派等を超越して其の會員を募り、萬國的調和歸一を計るものである。此の目的を達する爲に定められた同會の意見書を見ると

『第一に個人に其の精神を普及し

第二に會——即ち團體には委員を設けて此の會の發展に努める。

第三には此の目的を達する爲に世界的事業をなすのである。即ち出版物（雜誌、書籍）によつて世界に擴張するのである。又一方には世界より報告書を蒐集して研究に資するのである。之即ち人種間に起つた衝突、軋轢、凡て列國間に起る困難があつた場合に之を調和し疎通し世界的輿論を起すのである。

又外交官の教育に感化を及ぼし其の各自が赴任すべき國を尊敬同情するの資質を備へしむ。

世界の文明に後れたる國々を導き進むる爲に其の土地に會員を派遣する、之に要する資金を蒐め又は團體を作る。

各地には各支部の團體を構成して演說文學其他凡てこの會の目的普及の方法を講ずるのである。

世界巡遊學校獎勵會を組織して之に依つて外國の文明、相互の理解同情を厚くし、又相互に其の文明を學び且學ばしむるのである。

比較文明——例へば宗教、時代思潮、各國の理性、各國の價値等を知らしむる爲の雜誌を發行する』以上

斯くの如くにして其の評議員及び書記官は成るべく之を各國より選び、又各役員は其の國々の政府及び市政、クラブ、諸團體を獎勵して其の目的を達せん事に努めて居る。各地方部員は

其の地方に起る重大なる事件は之を正月一日と六月一日の規定報告期迄に齎し來るやうにして、常に世界的問題に就いて研究討議を怠らないのである。

此の外に尙漸次に世界的團體が多く起つて來たのであるが、昨年は又ベルジュームのブラッセル市に國際團體中央局といふものが組織された。政府は之に一千餘坪の地面を無代で貸し、其の種々なる設備の中にも圖書室には七萬五千冊の書を藏し、國際記録保存室には三十萬の記録を存して居ると云ふ。

曩きに萬國會議は一千八百四十二年に初めて開催されたるものであるが、爾來今日迄の諸種の會合を入れると其の會合數が二千百以上もある。而して現今の國際團體は其の數四百以上になつて居るが、昨年此の中央局が設立されて以來これに加入したものが既に百三十二（一千九百十年以後）で、先頃わが歸一協會にも加名を委任して來たのである。

斯様な次第であるから現代文明の先覺者は、此の協同の必要を絶叫して居るのである。協同とは云ふ迄もなく衆人の力を集むる事であつて、併して今の時代は單に抽象に非ずして既に實現の端緒を開いて居るのである。歐米の理想に非ずして世界に著々と實行の華を齎すの時、一階段の進歩を來らす時である。論よりも之等の種々なる事實及び近來我々の親しく目撃す

る事實にしても、東西の握手は日に頻繁となつて之に有力なる證明を與へて居る。例へば彼の菊地教授、新渡戸博士、島田君の外遊の如き、又彼よりはゾルダン博士、ホルト博士、近くはエリオット博士及び將に來らんとするメービ博士の如きを以ても、よく現今世界の大勢を察知するに足るものがある。之即ち世界の一發展を促して居るので、文明が一階段進まんとする曙光である。

狭きに比して寛く、貧しきに反して豊富に、小なるに對して大に、歸一調和せられんとする精神、即ち人間の理想―愛―美の發展である。今日我が國の婦人が西洋先進國の婦人に後れて居るといふ事は、この狭く、局部的に、他を容れぬ狹隘心の然らしむるものである。この場合に婦人がよく其の大勢に鑑みて世界的目的に向つて覺醒努力し、文明の後援者とならなければならぬ。斯くして婦人の天職、婦人の美を發揮し、婦人の精神に一波動を及ぼすことは目下の活問題である。

（「家庭週報」第百九十三號―百九十六號）明治四十五年七月

奉悼の辭

かけまくも畏き

天皇御不豫、不日して御重態に渡らせられ、億兆は恐懼、熱禱祈願して御平癒を驥ひ奉りしに其の効ひもなく、明治四十五年七月三十日午前一時四十三分遂に崩御被遊ました。陛下の赤子六千萬は號慟嗚咽止まる所を知らず、嗚呼如何にして此の微衷を表し奉らんか、言ふ所さへなき次第であります。茲に改元第三日大正元年八月一日吾等はわが日本女子大學校に相集り誠心誠意哀悼の意を表し奉るのであります。謹んで惟みるに大行天皇は御即位の始めに當り王政復古の御偉業を遂げさせられ、御代を「明治」と改元あらせられました。明とは字の示す如く明らかなる事、即ち光と云ふ意味でありまして、我が帝國が長く世界の文明から孤立して居りました際、先帝陛下には時勢の趣く所を御明察あらせられ、彼の今より五十年前、米の使節ベルリが我が門戸を叩きました時、畏くも其の響きに應じ被遊て、二百數十年間閉ざし來つた我が外交の門戸を御開きになり、廣く知識を世界に求むる御方針を御示しになりました。此の時より始めて我が國が世界の大勢に則り明らかなる眞理の光に沐浴して、爾來四十五年、陛下の鴻恩は恐察し奉る事々に畏き極みであります。陛下には實に日夜大御心を國威の發揚に傾けさせ給ひ、躬行精勵萬民の儀表にましましたる事は申すも畏れ多き次第であります。實に其の御乾徳は上は 皇祖皇宗の懿

徳を繼承遊ばされ、下は蒼生の上を軫念あらせられて、聖恩の甚深感激の外なく、外は世界列強の班に立たせ給ひ、膺懲の典を正し給ふ事前後二回、臺灣、樺太、朝鮮を併せて皇威赫々として萬古に絶し、内は赤子六千萬臣民を率勵し給ひ、躬ら戰士と共に國家の爲に終り迄よき戦ひを續けさせ給ふたのであります。斯くて小なる我が國を世界の日本とせしめ給ふたのであつて、申すも畏れ多き事乍ら、譬へば、小身代を大身代に御延ばしになつたと申す事が出来るのであります。然るに陛下には嘗て御謙讓の御徳を失はせ給はず、御日常は常に御質素に渡らせられました。又御慈愛の露滋く 皇太子殿下の御爲には其の御所の御事、御居間の御裝飾、光線の工合、空氣の流通に至る迄、總て御健康に適する様御心をそゝがせられましたが、御自らは夙夜に政務を親裁遊ばされ寸暇もあらせられず、左右の臣、斯くては玉體に御障りあらせらるゝなきやを恐察し奉つて、御靜養の御爲に豫め離宮造營の事を奏上する時は、皇后皇太子の御爲御許可はあれども 陛下御自らは嘗て數ある離宮にも避暑避寒の爲の出御は只一度さへ伺ひ奉つた事がないのであります。吾等六千萬臣民は來らんとする御即位五十年の金婚式を待ちて、せめて御慰め奉るべき時もがなと共に有難き太平の御代を謳ひ奉りしに、一朝遽に此の御事がありまして、未だ

深恩の萬一だに報い奉らず、心に描きし五年後の佳節亦空しくなりました。嗚呼この諒闇の天地に君一日も位を空うし給ふ事なく、先帝崩御の瞬間に於て皇嗣即ち嘉仁親王、一系の帝祚を踐み給ふたのであります。

勲聖文武 今上天皇陛下には勅を發せられて「先帝の大權を繼承し其の偉業を失墜せざらん事を期す」と宣はせ給ひて、上は大行天皇在天の靈を慰め奉り、下は蒼生の哀痛を撫し給ふ。今吾等六千萬同胞は深仁厚澤に浴して報い奉るに由なきこの微衷を今上陛下の御聖志に報い奉らんと神明の下に誓ひ奉るものであります。陛下には 先帝の定制に遵はせられ、改元して「大正」と詔勅せられました。恰も吾々が一年の終り及び元旦或は小世紀の始めに於て來らんとする時期の爲に計畫を立て、其れを表すに適當なる一の標語を撰ぶと等しく、明治の御代の終りを告げて茲に 今上陛下の御代に大正と御命名になつた事は誠に深い意味が其の御言葉の中に包含せられて居る事を恐察し奉るのであります。

實に先帝には我が國の道徳固定し、學問停滯したる時に、明治の御代を御開きになりまして、知識を世界に求め、暗きを照らして始めて我が國をして世界的大國民の行爲をなさしめ、其の品性を養ふ所の準備をなさしめ給ふたのであります。今吾等

臣民の本分は吾等の赤誠を表して深恩の萬一を 今上陛下に謁し奉る事でありませう。靜かに慮ふに今や我が國は國防上陸海軍の軍備を忽せにする事能はず、戰爭の結果として重き負擔は加はり、外交に、殖産に、工業に、最も國家多事なるにも拘らず、我が國には之に對する財源もなく、殖民地もなく、將た世界列強に勝れたる知識もなく、且廿數億の借財をさへ負うて居るのであります。此の際若し國民が華美に流れ、安逸を貪るならば、我が國は經濟的に滅亡を免れない。如何に精神があつても此の力に於て缺乏するならば、其の活きを全うする事は出來ない。吾々は 陛下の積極的に進歩的に國を御進めになつた其の御偉業を繼承すると共に、又 陛下の御質素に御謙讓に皇祖皇宗の御徳を御繼ぎになつた其の美徳を深く肝銘致さねばならぬのであります。

私共は 大行天皇の崩御を悲しむと共に其の御偉業を繼承被遊る、今上陛下の聖旨を拜察致しまして、どうか此の御遺志を全うするに就き、銘々態度を定め決心を固くし其の任を分つと云ふ眞心を持ち、其の誠意を表さなければならぬのであります。今我が赤誠を述べて、謹んで奉悼の辭に代へます。

（「家庭週報」第百九十四號）大正元年八月

歸一協會に就きて

コンコードヤ・ムーヴメント

この歸一的の運動が起つた所以は

第一に、現今世界には各種の宗教、信條、乃至道德律があるが、其の根本要訣は同一の點に歸着して居る。即ち孰れの宗教も眞理の探求、精神的生活の向上を目的として居る。

第二に、人類は幾多の人種に分れて居るが、各人種は相互の特性を理解し、互ひに同情し得るといふ共通の點を有して居る。

第三に、現今世界では種々な問題に關して各國民の利害が背馳する場合が多々ある。併し各國民が擧つて根本的に相互の誤解を除去し親善に努めれば、他國と抵觸しないで自國の福利を増進し、國民の發展を計る方が拓かれることは疑ひを容れないのである。

そこで異宗教、異人種、異國民の間に調和一致の點を發見し之を培養し發達せしむることが、此の運動の主眼とする所である。

併し調和一致を等閑に附して分離軋轢を事とするのは人類共通の缺點である。些細の事を争ひながら、却つてそれよりも大

なる主目的を抛擲して顧みない場合、否顧みることを忘れる事が屢々ある。宗教家が儀禮や形式に就いて喧しく論争する場合には、誰彼が皆等しく同一の神を禮拜して居ることを忘却して居る。國際間の戦争に於ても禍害を蒙るのは對手國よりも自國の方が遙かに多大なることを思はないのである。然らば何故に斯くの如き無益の争鬪軋轢を廢めて全世界が歩調を一にして文明の進歩發達を計り、人類全體の幸福利益を増進する途に進まないのであるか。斯く考へ來つて吾人は我が國に於ける有數の政治家、實業家、學者、思想家の意見を叩いた處が、孰れも衷心から吾人の見解に同感であつた。此の歸一的運動に賛成した人々が、東京で相集つて會合を組織したのは本年六月のことで、其の際之を歸一協會と命名した。本會の發企人は、井上哲次郎、中島力造、姉崎正治の東京帝國大學諸教授、上田敏、桑木嚴翼、松本亦太郎の京都帝國大學諸教授、同志社々長原田助、同教授ギユリキ、男爵澁澤榮一、森村市左衛門、早稻田大學教授浮田和民の諸氏である。

尙當日同會の出席者は、漢文學に造詣深き服部宇之吉博士、時計商服部金太郎、床次内務次官、博文館主大橋新太郎、大内青巒師、實業家和田豊治、日本郵船會社副社長加藤正義、東京醫科大學教授片山國嘉博士、日本銀行總裁高橋男、法學博士筧

克彦、早稻田大學總長高田博士、東京高等商業學校長坪野平太郎、東京商業會議所會頭中野武營、東京外國語學校長村上直次郎、グリーン博士 (Dr. D. C. Greene)、海軍中將八代六郎、海老名彈正、東京高等工業學校長手島精一、東北帝國大學總長、澤柳政太郎、海軍大佐佐藤鐵太郎、吉川男爵、目賀田男爵、前三菱合資會社支配人莊田平五郎諸氏であつた。之を以て見ても本會に集つた人々が、殆ど我が社會の全般を代表して居ることが知られるのである。其等の人々は一堂に會して、趣意書に掲載してある諸種の提案に關する議事を開いた。それから歸一協會の組織に移り、評議員其他の役員を選擧し、且同會の本部並びに研究機關の設置、及び機關雜誌の發刊、若しくは講演等により本會の趣旨を發表し尙本會を世界的運動の機關たらしむること等の要件を議決した。

ジャバンタイムスは此の運動に就いて次ぎの如く述べて居る。「聞く處によれば歸一協會の會上出席者の意見は、左の諸點に於て全然一致したとの事である。

第一、眞理に到達すべき方途は種々相異つたものがあるけれども、眞理其のものに差異はない。故に吾人は相共に、眞理を何處までも保持して、之に到達する種々の方法の間にある不調和を削除しなければならぬ。

第二、現今世界の平和運動は其の方法は長いけれども、其の目的とする所は軍備の絶對的縮小若しくは制限、或は國際問題の仲裁々判、或は各國經濟の調和等で孰れかと云へば、物質的影響の外に出て居らない。現下の精況ではそれ以上に精神的、道德的勢力を以て各國の關係を整備調和せしむる方法が就中望ましいのである。

第三、各國民各人種が聚合して社會を爲して居る土地、例へば布哇、フィリッピン若しくは支那の某地方の如く、諸民族の利害關係が錯雜して居る場合に、如何にせば平和公平が能く保たれるかといふことの研究は最も肝要である。

歸一協會の成立は、此の實際眞實に慶賀すべき事である。同會は頗る遠大な抱負を有つて居る。其の目的は蓋に國際的なるのみならず更に宇內的であるが、同時に發企人諸氏並びに賛助員の懷抱せる理想は、頗る高尚で眞に汎く世に推遷すべきものである」云々。

此の運動は其の本來の性質上全世界の賛同協力を得なければ發展を期することが出来ない。又其の効果も宇內的のものでなければならぬといふことは至つて明白である。

余は米國に到着以來二ヶ月間に同國學界、思想界の名流に會して、同國にも日本に於けると同様の精神的歸一の運動を起

し、我が歸一協會の如きものを組織してはどうであるか。然すれば東西相呼應して本運動を發展せしむることが可能であらうといふ事を説いた。處が多數の人士は此の意見を容れて同會に援助を與ふる事を約した。此の主なる氏名を擧げれば、エリオット博士、コロンビア大學總長バトラー氏、クラーク大學總長スタンレー・ホール博士、シカゴ大學總長チャドソン博士、ウイコンシン大學總長ヴァン・ハイズ博士、スタンフォード大學總長ジオルダン博士、オハイオ大學總長タムソン博士、ウエスターン・リザーヴ大學總長スウィング博士、ヨバリーン大學總長キング博士、コーネル大學總長代理クレイン博士、マウン・ト・ホリヨーク大學總長ウーレイ博士、スミナ大學總長バートン博士、アムハースト大學總長ミックレー博士、ダートマス大學前總長タツカー博士、ボストン大學總長マリーリン博士、シモンズ大學總長ルフェーヴアー博士、ウエルスレー大學總長ベンドルトン博士、ラッドクリック大學總長ブリッグス博士、ルードルフ・オイッケン教授、カウルター教授、イー・エー・ロックス教授、パウル・ラインシュ教授、グルフヒス博士、アンドルー博士、ホワイト博士、グラッドン博士、マッケンヂー博士、フォスター教授、シカゴ大學教授バートン氏、ジョンデウエー教授、ブレイクスリー博士、ムーア教授、ウッツ教授、男爵

夫人エスタ・フォン・ストネル、コロンビア大學教授、ブラッシュ博士、シカゴ大學教授ジャッド氏等である。(本文は某櫻楓會員抄譯す)
〔花紅葉〕第十一號)

漫遊みやげ

私は今日此處に歸つて再び皆様御目にかゝる事の出来るのは誠に喜ばしい次第であります。實はもう少し元氣を以て歸る積りでありましたが、甚だ不元氣な顔で御目にかゝると云ふのは残念であります。然し思つたよりも非常に丈夫でありました。一度も病氣と云ふ病氣には罹らなかつた。只油斷はしなかつたが、ベルリンを去つて南部の各大學へ廻つて漸く歸つた晩、寢に就くや否や熱が急に三十九度以上に昇つた。幸ひに其の翌日は熱も下つたがどうも汗が出て暑苦しいから、醫師に聞くと、其れは着物が餘り多過ぎるからだと云はれました。多分これならばよからうと思つて油斷したところが、ぶり返つて再び悪くなつて今度は三十九度八分に昇つた。折よく其の翌朝旅から歸つて來た入澤博士が私の宿つて居る二階の向ふの部屋に居られたので大變助かりました。——實は其の前不思議にも私がバリーの宿に居つた時大學に出かけようとする私の部屋にハガキ

が来た。其れにはダクター入澤と書いてあつたのでこれは何かの間違ひではあるまいかと思つて居た處が間もなくそれは私であると云つて挨拶をしに來たのが入澤氏でありました。これが元になつて同氏と別れる時に奨められて今度は氏の向ふの室に部屋をとつたのであります。——こんな譯で色々御世話になつたが此の時の病氣はインフルエンザでありました。其の外は病氣といふ程の事もなかつた。私は元來船に弱いので大西洋を恐れた。丁度モンタニヤ號に乗つてから三日程立つて非常に浪が荒れて船客は皆將棋倒しになる、何しろ五百尺以上の浪であるから大船と云へども危険でないとは云はれない。然るにも拘らず此の時も少しも船に酔はなかつた。太平洋、大西洋、和蘭の海峡と船は乗りづめであつたし、陸へ着いても晝は大抵自働車で歩く、殆ど始終船、車に乗つたやうなものであつたが一向に弱らなかつた。大いに丈夫になつたと自ら喜んで居つたが、終りに一寸やられたのは残念である。で實際弱くなつたのではないのであります。併し長い間風呂へも入らず、昨夜歸つて始めて湯に入つたといふやうな譯で障らねばよいと氣を付けて居るやうな次第でありますから、種々失禮な點があるのは豫め御断りして置きます。

扱て私が向ふへ行く時皆さんから御贈りに成つた土産は澤山

ありましたからどういふ風に持つて行かうかと考へて先づそれを三つに分けました。其の一部はニューヨークのコロンビア大學へ持つて行きましたが、此處には特殊の博物館があつて支那の女學校、小學校、幼稚園生徒の製作品即ち支那の製作品が非常に多く陳列されて居りました。私は教育に非常に力のあるコロンビア大學殊にプロフエツサーデウエイの教育主義を參考としましたから有益に用ひらるゝ事と思つて持つて行つたのです。支那の物の澤山ある處へ日本の一部だけ並べる事は餘り好ましくない事を感じました。殊に支那の物は見た處が非常に立派であるからどうかと思ひ兎も角もデウエイ氏に上げた。デウエイ氏は直ちに支那の製作品と日本のものを比較して云はるゝには、支那の製作品はどうも模倣が多い、手本を眞似て製つてあるから子供の製作品としては餘りに好過ぎると思ふ點がある。然し日本のは子供銘々が自ら考へ、或は見た物を頭で考へて自らの工夫で製つたものであるから其處に非常な相違がある、と云はれて日本の幼稚園、小學校殊に我が女子大學の教育主義及び教育の實際が如何に行はれて居るかをよく分つてくれまして。又他の一部の土産はクラーク大學の總長スタンレーホール博士に上げた。同氏は米國に於ても兒童研究の卒先者であつて兒童の上に非常に熱心な考を持つて居らるゝ人であるが、丁度

此のクラーク大學の三階に教育博物館が出来て居つて、その中に日本のものが少しもなかつたから非常に博士も悦ばれて早速此處に陳列されました。も一つは英國に持つて行つてミス・ヒューズ及びロンドン大學に關係せるヒーズ博士に上げた處が、博士も日本に何か此の種のを送らうと云はれて居りました。そんな譯で皆さんから戴いた土産物は非常に有効に使ふ事が出来ました。

(「家庭週報」第二百十三號・成瀬校長歸朝歡迎會に於て)

大正二年三月

時機は來れり

私の此の度の旅行に就いては同情者諸君の一方ならぬ御注意によつて、七ヶ月の間を何の顧慮心配もなく、自由に自分の目的を遂行し得る様にして戴いた事は誠に云ふべからざる感謝の念に満たされて居る次第であります。歸朝以來、何かにつけて今度の私の旅行みやげを發表致したいと思ふのでありますが、何しろ多忙なる上に實際時日も未だたゞないので自分の觀て來た事、考へて居ります事を整理し、順序たてゝ話すといふ處迄に運びませんことは誠に遺憾でありますが、併し追々には發

表、實行すべき時もあらうと存じて居るのであります。茲に再び私は自分の此の度の旅行の目的内容と及び其の實感の大略を披瀝したいと思ふのであります。

七ヶ月と云へば可成り長い間ですが、時日の割合に多くの目的を携へて行つた私には、實に忙しく且短い間でありました。出立の際にも申しました様に、米國は二十年目の地、歐洲は初めてでありますから、凡てに進んで居る彼の地の教育に就いて視察研究すべき事は實に多く且必要でもあつたのであります。併し又私の目的否世界の今日の目的は今日の所謂文明、教育に致しても其の外部の發展——設備方法——などに就いて新しき多くの調査研究を積むよりも、より重大なる根本目的は今一つの他の方面に在ると信じて居るのであります。即ち教育道德の根本問題、生命を培養する根本に在るのであります。それで私は此の度の旅行を、殊に宗教、風俗、校風といふやうな内面的の研究に力を集めたいと希望したのであります。我々が十年間わが校の方針を實行いたしたる其の餘の問題、今日行き詰まつて居る問題は即ちこれ、教育の動機、道德の動力、生命の問題であります。此の問題を研究するには只學校の設備を參觀し、其の方法を調査するだけでは不充分であります。私は成

可く今日の歐米の教育の原動力たる其の宗教、其の教育、其の共同的活動の中に共に生活して、自ら経験し、自ら直観するに非ざれば、この度の旅行の目的は達し得られないと考へて居りました。この方針を以て其の他の教育事業を觀察するといふ事が私の主なる目的でありました。

この外に私の懐いて居つた今一つの考は、それは送別の際にも明らかに申さなかつた事ではありますが、自分の意中には如上の教育視察を致しまする外に、今一つの目的を以てこの旅行中を生活して見たいといふ考を持つて居りました。豫て御承知の方もありませんが、夫れは此の高等教育に盡力しこの精神界の事に心配して居らるゝ東京及び京都の帝國大學の人々と、歸一協會なるものを起し——之は將來インターナショナル・ムーブメントとする迄の希望を持つて居ります——、私の主目的の教育視察と同時に、この歸一協會のことに就いても、彼の地の學者思想家に計らうといふ目的を懐いて居りました。

尤も之は豫め辯解致して置きますが無論私が歸一協會の代表者として選ばれて行つたわけではなく、將來その目的の端緒ともならば幸であるといふ考を持つて居つたといふに過ぎないのであります。けれども今回私が訪問し得たる歐米の各大學に於て、或は會見したる總長及び教授と語る時にも、私は女子教育

の事と歸一協會の事とは常に同時に話したのであります。この事は出立前は果してどの程度迄爲し得るかといふ事が見當が立ちませんでしたが、發表も致さなかつたのであります。其の後諸方面で私が彼の地に於て報告したる事や、演説した事が新聞などにも掲載されたるに依つて、この事も御承知下さつた事と思ひますが、茲に私が歸一協會を代表したる程度、及び私の態度に就いて一言申述べる必要がある事と思ひます。

私はポストン及びニューヨークに於ける諸會でも常に自分は歸一協會の關係及び旅行の目的を發表しました。私は女子大學を創立する當初に於ての教育の方針は、其の根本は宗教的生命に達しなければならぬことを主張した。けれどもその宗教的生命といふ事は所謂基督教所謂佛教の意味ではなく、凡ての宗教の根本の生命を以て女子教育の根本として主張し貫き來つたのである。故に私の意志、私の生活、私の主義目的は一にして分ける事は出来ないであります。女子教育の根本を説いて行けば必ず歸一協會の事に及ぶので、たま／＼この主張を打ち明けて語り合ふた仲間の間で歸一協會なるものが期せずして出来たわけなのであります。既に其の精神であり、其の生活であり、其の目的である以上、それが歸一協會であつてもなくとも私の主義を語り、私の主張を述べて私の教育方針を説いたのであ

る。人間の教育は機械的の事のみを以て満足する事は出来ぬ。其の生活の根本要求は生命に在る。宗教的生命にあるといふ事を説いたのであります。

×

私の今回の旅行に於て久々にて會見を得たる人々の中にはダートマス總長タツカー氏の如き、又クラーク大學總長スタンレーホール氏及びレビツ氏、神學博士スカッター氏の如き私とは關係淺からざる人々が少くなかつたのであります。斯ういふ人々に會うて別るゝに臨んで、私は自分の主義自分の信仰を告ぐるといふ必要がある、又女子大學に於て十年間行ひ來つた經驗を具に告げ、今後世界の學者世界の諸大學と相提携して進むには如何にすればよきかといふ問題に入るのである。この場合に於て私は女子大學の教育方針の根本問題と、今一つの歸一協會を代表していふ所の問題とは二つにして而も根本は別けることの出来ぬ一問題となるのであります。故に又歸一協會の事を話すにしても、彼の趣意書にある丈けの事ではなく、私は常に自分の生活、自分の主義、殊に十年間の精神的經驗をなしたその事を述べたのであります。斯ういふ次第であるから、私は常に自分の信仰、自分の主義を話す時には彼の國の基督教のタ

ームを使はずして、東洋の言葉——佛教、儒教、神道——各自の宗教の言葉を以て話したのであります。

エリオット博士は曰く、「日本に於ての總ての問題の根本及び教育の動機問題に就いて、最も大切なものは女子教育問題即今の女子大學である」。又曰く「日本に於ては今日既に宗派的宗教は何等の意味も持たないやうである云々」。又紐育に於ける會合の時博士は私を招んで「歸一協會も大切な事であるが女子大學は最も大事である」と云はれた。私はこれに答へて然り女子大學は大事である。併し日本の女子大學も其の根本の力を養はなければならぬと申した。即ち歸一協會の趣意は我が女子大學教育方針の根本主義と同一のものである事を語つた處、博士も非常なる熱心をもつて賛成し、且この事を他の人々に説かれたのであります。斯ういふ次第で歸一協會と女子大學との兩問題は此の度の私の漫遊目的に於ては離す事の出来ぬものであります。歸一協會の趣意書を示す處には必ず女子大學の規則書をも添へたのであります。

其の後エリオット博士と第二回目の會見の時、博士は私に「女子大學の爲に資金を募集しないか」といふ事を以て聞かれた。私は「ありません」と答へたのであります。其の後他の同情者諸氏からも度々女子大學の爲に、又は歸一協會の爲に基金

募集を奨めた人がありましたが私は是に答へて「私は日本の爲に募金は致しません、米國の歸一協會に必要な基金は米國で募り、日本に於て必要な費用は日本に於て集める積りである」と申したのであります。兎に角斯くの如き熱心なる態度を以てエリオット博士は將來歸一協會の幹事長として立つ事になり、コロンビヤ大學總長バトラ、及び少壯手腕家グリーン氏、其の他有數の人々が發起幹事たる事になつたのであります。これに依つて歸一協會は益々意味深いものとなつたのであります。此等の人々の間に於ても、わが女子大學の爲に資を投ぜんと希望する人々のある事を以て説き、且奨められたが、私は常に「この主義（女子大學の教育主義並びに歸一協會の根本動機）を眞に賛成する人々がその宗派別、人種別其等の總てを去つて、眞に人類發展の爲に盡さうとならばこの世界の半面即ち東洋は最も大切な半面であらう。その東洋を救ふには今日の東洋女子教育日本の女子大學は大切なものとなるであります。この意味に於て將來の人道の爲に盡さんとする人々が國境を越えて此所に其の資を投じ、此所に其の意志を膺らさんと自ら資を投ぜんとする人々があるならば、其の厚意を迄拒絶する事はあるまい、けれどもこちらから資金を募集することは決してない」と主張し、且答へたのであります。

亞米利加に五百の大學がある。此等の大學は何れも盛んに、二、三の建築設備をして居らない所はない。各自に其の勢力範圍に手を擴げて經營に汲々として居るのであります。斯様な次第であるから何れの大學も金が足りない、又亞米利加の金持も今日は只名を擴める爲に金を出す者は少くなつた。例へばマウントホーリヨクの七十五年記念祭に最も多額なる寄附金をしたのは某末亡人であつたが、この婦人の夫の人が死去の際其の遺書を見ると、數百磅の金を土耳其の大學に寄附すべしと書いてあつた。夫れは嘗て土耳其に遊んだ時、其の人は同地の大學を心竊かに注意し、其の學校の様子を視、校長を視、學生を視て、而も誰にも語らずして歸國したが、感ずる所あつて如上の如き遺言書を置いて逝つたのである。畢竟資を投ずる亞米利加の資産家も只自分の名を出す事を以て目的とせず、其のものゝ眞價を認めるやうになつた一例であります。

要するに教育の根本動機、人格教育などと云ふ事は世界各國共に從來は少しく下火となつて居つた状態でありましたが、今日は將に復活の時機に到來したのであります。物質的文明の壓迫の下には人間の眞生命は遂に満足を得る事が出来ない。教育の設備―規則の改制―力の充實を欲するけれども其の根本は人格の教育であり生命の教育であります。これを缺いては教育の

目的は到底達し得られないのであります。即ち機械的のみでは満足が出来なくなつたのであります。

今日歐洲の思想界の根本となつて居る獨逸のオイケン氏も茲に價値を認めて今度の歸一協會にも、大いに協力しようとして居られる。同じく獨逸で機械學者として有名なヘッケル氏も亦「私は機械學者であるけれど、オイケンの考に全然賛成である」と云つてこの二人の學者は兩々相共同しなければならぬ事を説かれた。左に兩博士が歸一協會に對してせられた署名を掲げませう。

エーナ大學オイケン博士 日本歸一協會の努力は衷心の満足をして之を迎ふる所なり。抑々現今に於ては人生々活上の主要問題は全文明國民の協同解決を待つ可きものなるに拘らず、各國民立脚點の差異に因り、此の問題に對し往々對敵的感情の發見を見るは、誠に遺憾とする所にして將來一層有效に其の協同解決の實を擧げ、且意思及び現實の上に、更に適切なる調和連絡を期するは特に要用なりとす。之が爲には恰も、我が歸一協會の努力に屬せる東西洋國民間の相互的諒解及び其の心情の調和は實に急務中の急務に屬するものと謂ふべし。

エーナ大學ヘッケル博士 個人として子の友人にして、且尊敬すべき同僚たるルードルフ・オイケン氏の前記意見に對し予

は全然贊同の意を表す。就中吾人兩者哲學上の見地兩極に相反馳せるに於て一層興味を覺ゆ。

千九百十三年一月十三日

ヘッケル氏は一元論者物理學者にして機械的學者也オイケン氏は二元論者心理學者にして唯心論者也。斯くの如くにして、米、英、獨、佛、各大學總て歐米の今日の思想界は大いに動いて來たのであります。「教育と研究とは兩々相俟つて完き人間生活を得るので、若しも從來の如く總長及び教授が研究室に於てのみの教授が主なる職責であるならば、研究と教育—人格教育とは分つて教育しなければならぬ」といふのは今日獨逸の新傾向である。

今日の歸一協會は決して我々が成立せしめ、我々が歐米に行つて説いたのではなく、世界の傾向であり世界の必要であるのであります。我々は久しく教育の改革時機の來らんことを待ち、且其の準備を致して置かう思つて居りましたが、其の時機は既に來たのであります。寧ろ準備の後れたるを思はざるを得ません。最早今日我々の重大なる責任はこの時機に處するの覺悟であります。

〔「家庭週報」第二百十四、十五號・校内教職員發起の

歡迎會にて〕 大正二年三月

婦人の力

英國人即ちアングロサクソン人は、家庭生活けいけいせいふくといふことに非常に重きを置いて、殆んど彼等はそれを生命の如くに思うて居る。彼等が殖民事業に成功したといふのも、ツマリ家庭其者を持つて出かけたからである。何れの國に於ても皆さうではあるが、殊に英國人は家庭に重きを置き、宗教といひ、教會といひ、社會と言ひ、國家といふも畢竟するに其元は皆家庭けいけいから發して居る。國民性の原因をなすものも無論家庭である。是は獨りアングロサクソン人に限らず、歐米到るところ皆さうである。然るに近來家庭生活といふものが非常に荒んで來た。それは何に原因するかといふと、工業政策がそれを侵犯せいかんしたのである。社會の機關が完備し、規模が大きくなるに従つて、益々萬事が分業的になる。それに連れて家庭といふものに非常に影響を及ぼし、昔は下層の者ばかりが、テネメン・ハトウス——即ち棟割長屋——に借家生活を營んで居つたのが、今では中流の者までが其生活をするやうになり、二階や三階に住つて居るものはエレベーターに乗つて出入するといふ鹽梅で甚だ

家庭が無味乾燥

に流れ、一切の事が悉く機械的に流れ、昔のやうな純なる自然の美はしいところが追々に缺けて來つゝある。それであるからしてニューヨークあたりへ行つて見ても、男女共に皆昔の眞の家庭を慕つて、一種の家庭病けいけいびょうに冒されて居る。紐育ニウイウの五丁目といふ所は、彼の有名なカーネギーや、ロックフェラーなどゝいふ大金持の住んで居る所で、尤も繁華なところであるが喧騒を避けて態と電車の設備をさせない。然し電車は通らなくとも、自動車や何かゞ五月蠅い程往き來して、マゴ／＼して居ると轢かれてしまう。で私は或る人に向つて憊んな華やかなところに住つて居て、表面は大層良いやうであるが、其實甚だ不愉快な生活を紐育の人は續けて居るのであらうと申しました。さういふ有様で、工業政策が極度に發達すると、其反對に

内的生活ないのせいふくが甚だ乏しくなる

で、是は何うしても補はねばならぬことゝ私共は見て切實に感じた。併し英國にせよ米國にせよ、家庭生活を重んじ慕ふといふことは、昔と少しも變らない。而して其家庭生活を破壊し壓迫して物質的文明に進んでそれに打ち勝たなければならぬ時代になつて居る。又昔は宗教に暖かい生命があつて、それが家庭生活を維持する一つの有力な要素であつたが、今日の科學的機械學的思想はそれをも打ち破つてしまつた。或は現に打ち破り

つゝある。併し是では到底不可ぬといふことは有識者は皆等しく心付いて切實に感じてゐる。ホームの暖かでなければならぬといふことも充分感じそれを何とかして得たいと心も碎いて居る。而してそれは第一

婦人の力

に俟たねばならぬ。そして今日聊かなりとも二十年前の音楽、美術或は文學といふものを保ちつゝあるのは皆婦人の力である。それであるから今後は益々趣味の豊富な人格の高い婦人を養成し、其意志の力を以て物質的の壓迫、或は種々の誘惑に打ち勝たねばならない。制御コントロールしなければならぬ。言葉を換へて言ふと、萬事に物の見越しの付く婦人の出現を期せなければならぬ。今日歐米のホーム・ライフが僅に未だ支へられて居るのも、宗教が幾分なり生命を保持してゐるのも、皆婦人の力によつて守られて居るのである。又其弊害キズナを禦ぎ戦つて居るのも夫婦の倫を保つて居るのも婦人の力である。個人主義が唱へられ、生存競争が激しくなつたにも拘はらず尙且つ其暖かみが保たれて居るのも婦人の力によつてである。私は二十年振りて亞米利加に行つたが、土地の知人は矢張り昔に變らず、私の顔を見て皆自分の所に泊るやうにと親しげに言つて呉れた。それ等の暖かみも皆婦人によつて保たれて居つて、その郷里とか家庭

とかいふ美はしい情のあるところは、日本の家庭に於ける情と少しも相違がない。斯様な譯であつて要するに是は皆婦女子の力と言つても宜いのである。であるから今後は益々女子教育を盛んにしなければならぬ。教育の狭い人格の低い女子であつては其家庭は紊亂せぬ譯に行かない。のみならず今日日本でも人が心配して居る例の

個人主義

といふやうなことが行はれ、其結果は甚だ面白くないことになる。私の見るところでは、現に歐米あたりで盛んに家族制度を破壊しつゝある物質的文明を防ぎ、以て其暖かみを保たうとするには、どうしても婦人の力に俟たなければならぬと思ふのである。で婦人が皆それを自覺して呉れ、ば國家が衰運に赴くやうな憂へもなければ、又宗教などに新らしく芽を吹かせることも出来る。然るに今日歐米あたりを一寸覗いて來て亞米利加などが個人主義になつたのはツマリ婦人をして自覺せしめたからであるなど、論ずるものがあるとすれば、それは實に皮相の觀察と言はなければならぬ。前にも言つた如く工業政策が盛んになつて來て、家族制度がドシ／＼破壊されつゝある今日、良く自らを保ち、婦人の地位を維持し、物質文明に打ち勝たんとするには、今迄のやうな弱い婦人では何うしても駄目であつ

て、それには

女子の高等教育

が益々必要である。歐米の家族制度を破壊した波は日本にも何時かは襲うて来る。否現に襲ひつゝある。而して是を禦ぎ日本固有の特色を保持せんとするは大いに婦人の力に俟たねばならぬ。現時の日本は年一年に人口は殖ゑつゝあるに富の力が是に添はず、益々人が餘つて生活が非常に六ヶ敷くなつて來て居る。此上は大いに外國に出かけて活動するが宜い。然るに亞米利加邊へ行つて見ても、男子は居るが婦人といふものが誠に乏しい。従つて男子も勇氣が無い。故に今後は單獨に行かず、何れも皆家庭を持つて行くに限る。それには何うしても意志の確かりした見識の高い婦人が必要である。

現時の有様では内を思うても外を思うても實に心細い。故に今後は益々奮勵して、日本婦人の地位をして男子と同じく世界に進ましめねばならぬと深く感じる。

（「婦女新聞」第六百七十一號）大正二年三月

